京都府埋蔵文化財情報

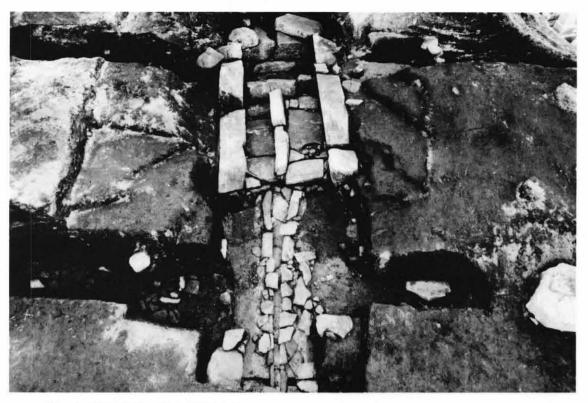
第 16 号

昭和60年度	E 発掘	調査	予定の	遺跡…			杉	原 和雄1
昭和59年度	医京都	3府下	埋蔵文	化財の	調査		土	.橋 誠5
亀岡市小金	验岐 1	• 3 •	7 号墳	の調査			田	代 弘18
一昭和59年	E 度発	掘調	查略報					25
24.	志	高	遺	跡	26.	青野遺跡	第9次	
25.	多	保	市城	跡	27.	奥山田池	也遺跡	
資料紹介	亀岡	市穴	川遺跡	の表採	遺物につい	ヽて…村尾	政人・田	代 弘33
府下遺跡紀	介	28.	正道官	衙遺跡	29. ‡	方田古墳群…		41
長岡京跡調	調査だ	より						50
財団法人京 組織および	京都府 『職員	埋蔵 一覧	文化財	調査研	究センタ-			55
								56
受贈図書-	-覧…							57

1985年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版 1 小金岐古墳群



(1) 小金岐 1 号墳 横穴式石室全景



(2) 小金岐1号墳 玄室見通し図

昭和60年度発掘調査予定の遺跡

杉 原 和 雄

昭和60年度は、新庁舎に移転して2年目であり、施設、設備にも慣れ、業務もいっそう 充実していくものと思われる。前年度の調査成果は、本誌面に報告している通りであるが、 調査受託23件、遺跡数39件について実施した。また遺物整理作業は、庁舎の整理室を活用 し、集中的に行うことも試みた。

本年度は、既に受託し現地の発掘調査を実施しているもの及び近く受託が予定されるものは、別表のとおり32件で、遺跡数は約60件になると予想される。前年度からの継続事業が半数以上となるが、新規のものも増加し、63年の京都国体に伴い、道路事業に関連する調査が多い。事業量の増加に伴い、調査課に2名の調査員が増員され、事務局長以下、総務課6名、調査課32名、計39名の体制で対処することになる。以下予定遺跡の概要を記す。

1正垣遺跡, 2桃山古墳群は圃場整備に伴うもので, 集落跡, 中期後半の古墳の検出が 期待される。後者は, 国営農場開発に伴う調査の初年次に当る。

4志高遺跡,5河守遺跡,6石本遺跡,9青野西遺跡,12味方遺跡,13青野遺跡は,北部3市にまたがり,いずれも由良川の自然堤防上に立地する集落跡である。由良川底からは,古くより,様々な土器や石器が採集され,こちらの遺物がどのような遺構に伴っていたかについて永らく疑問視されていたが,上記の遺跡を含む近年の発掘調査により徐々に解明されつつある。本年度の調査についても縄文~中世に至る多大の成果が予想される。

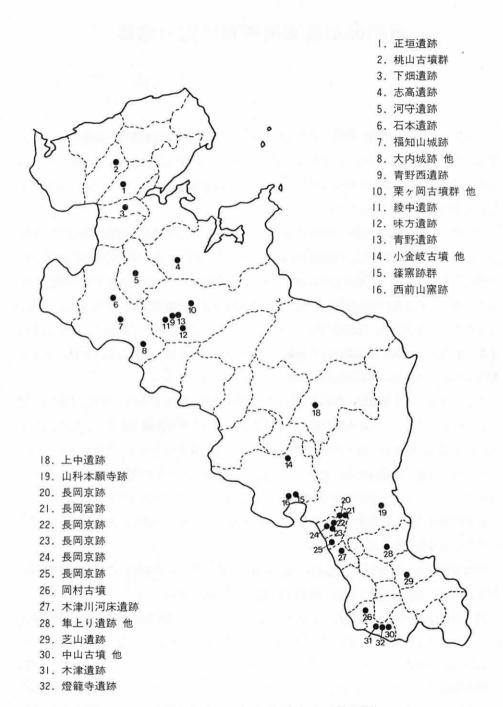
8 大内城跡他は、中世城郭の土塁や、古墳時代後期の石棺を調査し、あわせて、宮遺跡 他 6 件の遺物整理を行う。

11綾中遺跡は、奈良時代前期創建の綾中廃寺に隣接するものであり、古墳~奈良時代及び中世に至る遺構が期待される。本年度は試掘調査を実施する。

14小金岐古墳他は、横穴式石室2基の調査に加えて、丹波国府推定地でもある千代川遺跡の一角を調査する。前年度、国府推定域の西端部で試掘した結果、奈良時代の他、弥生、古墳時代及び中世の遺構・遺物が検出され、今後の全面調査への手がかりが得られている。

15篠窯跡群は、今年も広範囲にわたる試掘調査を実施する。16西前山窯跡は、篠窯跡群内で新たに確認された窯跡であり、灰原が露出している。隣接地には、昭和55年度に調査され三角窯として注目された前山2・3号窯がある。

18上中遺跡の本年度調査地は、前年度の分布調査の結果、土器片の散布が見られた所で



昭和60年度 発掘調查予定遺跡位置図

番号	名 称	種別	所 在 地	原因工事	象面積	調査予 定時期	備考
1	正垣遺跡	散布地	大宮町字奥大野	圃場整備	m² 500	月 10~11	新 規
2	桃山古墳群	古 墳	峰山町字内記	国営農場		7~10	"
3	下 畑 遺 跡	散布地	野田川町三河内	学校建築	200	5~6	//
4	志高遺跡	"	舞鶴市志高	河川改修	2,600	4 ~ 3	継 続
5	河 守 遺 跡	"	大江町字河守	鉄道建設	2,000	$5\sim7$	//
6	石 本 遺 跡	集落跡	福知山市石本	11	P-	5~3	遺物整理 //
7	福知山城跡	城館跡	// 内記	庁舎建設	400	10~11	新 規
8	大内城跡他	// 他	// 大内 他	道路建設	900	4~3	継 続
9	青野西遺跡	集落跡	綾部市青野町	河川改修	-	5~3	報告書 //
10	栗ケ丘古墳群他	古墳他	// 小呂町 他	工業団地	1,500	9~11	新 規
11	綾 中 遺 跡	集落跡	〃 西町	住宅建設	1,500	$4 \sim 7$	//
12	味方遺跡	集落跡	// 味方町	橋梁新設	400	7~8	継 続
13	青 野 遺 跡	"	〃 青野町	//	150	6~7	//
14	小金岐古墳 他	古墳他	亀岡市大井町 他	道路建設	1,900	5~3	//
15	篠 窯 跡 群	窯跡	ル 篠町	11	4,000	4 ~ 3	"
16	西前山窯跡	"	" "	砂防工事	300	7~8	新 規
17	(ダム建設関係)	散布地		宅地造成			"
18	上 中 遺 跡	散布地	京北町字下弓削	学校建築	658	5~7	継 続
19	山科本願寺跡	寺院跡	京都市山科区	河川改修	400	7~8	新 規
20	長 岡 京 跡	都城跡	向日市鶏冠井町	庁舎建設	700	5~7	"
21	長 岡 宮 跡	11	〃 寺戸町	競輪場改築	1,200	9~10	"
22	長 岡 京 跡	11	長岡京市友岡	学校建築	463	$6 \sim 7$	"
23	11	11	// 開田	交通安全	60	6~7	継 続
24	11	11	ル 粟田 他 4件	道路拡幅		5~12	立会調査 //
25	長 岡 京 跡	都城跡	大山崎町下植野	交通安全	200	7~8	継 続
26	岡村古墳他	古墳他	田辺町大住他	道路建設	4,000	5~3	"
27	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市八幡	施設新築	1,400	4~12	"
28	隼上り遺跡 他	散布地他	宇治市菟道	道路建設	2,400	4~12	11
29	芝 山 遺 跡	集落他	城陽市寺田	道路改良	2,000	5~8	新 規
30	中山古墳他	古墳他	木津町字梅谷 他	宅地造成	2,800	4 ~ 3	継 続
31	木 津 遺 跡	散布地	// 木津	庁舎新築	1,062	10~11	新 規
32	燈籠寺遺跡	11	// 内田山	学校建築	534	7~8	継 続

昭和60年度 発掘調査予定遺跡一覧表

あり、弥生~古墳時代の遺構が残されている可能性がある。

19山科本願寺跡は、蓮如上人に係わる歴史上著名な遺跡であり、中世の平城としては府 下でも大規模なもので、土塁や環濠が一部現存している。

20~25は,長岡京跡に関連するもので,22は右京六条二坊に当るほか,25では,従来の調査結果から,古墳時代後期の住居跡が検出される可能性がある。

26は、岡村古墳他9か所で、古墳又は散布地の遺跡確認を行う。

27木津川河床遺跡は、継続事業として弥生~中世に至る集落跡の検出に努める。

28隼上り遺跡他では、中世墳墓と横穴式石室1基の調査を行う。

29芝山遺跡は、台地上の集落跡であり、隣接地に前方後円墳梅ノ子塚がある。

30は、中山古墳他5か所の古墳又は散布地の調査を行う。

31木津遺跡は、1,000×600m に及ぶ広域遺跡で、過去4度の発掘調査によって、奈良時代の建物跡、土器、瓦等が検出されている。

32燈籠寺遺跡は、前年度の調査で家形埴輪を伴う方墳が検出される等成果を収めたが、 本年度は、丘陵端部において調査を行う。

以上の発掘調査事業のほかに、年6回の研修会、年1回の講演会を実施し、機関誌『京都府埋蔵文化財情報』や調査報告書などを刊行していく予定である。また前年度の調査成果を公開する恒例の展覧会は、本年度も8月下旬に開催したい。今年度の新しい試みとしてこの展覧会に出陳する資料が、山城町の京都府立山城郷土資料館においても同館の企画で紹介されることになり、当調査研究センターとしても全面的に協力していきたいと考えている。研究助成事業は、「京都府下における弥生式土器の編年的研究」をテーマに3年度目にあたり、今年度は、丹波・山城地域において実施される予定である。

発足後,5年目を迎える当調査研究センターには、様々な課題があると言えるが、本年度に検討すべきものとして、収蔵庫内の整備に伴う遺物や各種図面等の収納基準の作成、遺物整理基準の作成、台帳整備、成果物の管理方法等、を掲げることができる。また、多種多量の情報や資料を効率的に処理するためのコンピューター導入についても大きな課題と言えるであろう。

なお、本年度には、京都府教育委員会と共に、中国陜西省文物管理委員会から文化財研修生を受入れる計画がある。当調査研究センター職員にとっても、広い視野を養う最良の機会として大いに推進、努力していきたいものである。

(杉原和雄=当センター調査課 課長補佐)

昭和59年度京都府下埋蔵文化財の調査

土 橋 誠

京都府下の埋蔵文化財の発掘調査は年々増加の一途をたどり、当調査研究センターも昨年度整理作業も含めて39か所の調査を実施した。当調査研究センターの調査は「国、公社公団及び京都府が行う開発工事に伴う遺跡の発掘調査」であるが、中でも道路建設に伴う調査が12か所と多く、豊富な資料を得ることができた。京都府下では、京都府教育委員会・各市町村教育委員会・財団法人京都市埋蔵文化財研究所・財団法人長岡京市埋蔵文化財センター・平安博物館・京都大学埋蔵文化財研究センター・京都大学構内遺跡調査会・同志社大学校地学術調査委員会等の各機関が発掘調査を進めている。

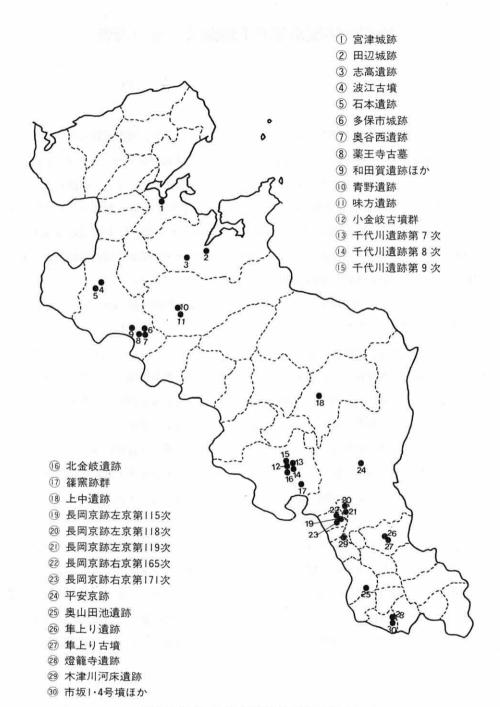
本稿では、まず、当調査研究センターが実施した調査の概略を述べたあと、上記の各機 関が実施した調査のうちでおもなものについて概要を述べることにしたい。

別表1宮津城跡は、宮津谷を南から北に流れる大手川の河口東に位置する近世城郭で、 細川氏・京極氏・永井氏・阿部氏・奥平氏・本壮氏の各大名の居城となった。調査地は大 手川右岸にあり、新・旧2時期の石垣を検出した。古い石垣は花崗岩の自然石をつみ上げ たもので、京極氏の築造と考えられる。基底石の下には胴木も遺存していた。

2 田辺城跡は、北に舞鶴湾、南に沼沢地の広がる地に位置する近世城郭である。別名舞 鶴城とよばれ、天正年間に細川氏により築造され、細川氏・京極氏・牧野氏の居城として 栄えた。調査地は「三ノ丸堀跡」に位置していたが、漆器・はし・銭貨等が出土した程度 で、田辺城に関係するような遺構はみつからなかった。

3 志高遺跡は、由良川改修工事に伴う発掘調査で、これまで舞鶴市教育委員会が中心になり調査が進められてきたが、昭和59年度から当調査研究センターが実施するようになった。遺跡は、由良川河口から約 10km 遡った自然堤防上の左岸に立地し、弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡として有数なものである。昨年度調査の結果、古墳時代の溝・自然流路・柱穴等を検出した。遺物は、古墳時代の土師器、須恵器のほか、弥生土器等も出土している。

4 波江古墳は、由良川と牧川の合流点付近の低位丘陵上にあって、3 か所が古墳である ことがわかった。3 基の古墳は、丘陵尾根線上に連続して存在し、それぞれ丘陵を溝で切断し、若干の盛土で墳丘を構築していた。主体部はいずれも木棺直葬で、時期も6世紀後 半から7世紀初頭に比定される。



昭和59年度 発掘調査実施遺跡位置図

番号	遺跡名称	種別	所 在 地	担当者	調査期間	概要
1	宮津城跡	城 跡	宮津市柳縄手	竹原 一彦	60. 2. 6 ~ 3. 30	新旧2時期の石垣
2	田辺城跡	11	舞鶴市大字南田辺小 字大内口下83	山下 正	59. 10. 11 ~11. 7	漆器・はし・銭貨等 が出土
3	志高遺跡	集落跡	〃 字志高	岩松 保	59.10. 5 ~60. 3.27	溝・自然流路・柱穴
4	波江古墳	古 墳	福知山市上天津字波 江	辻本 和美 竹原 一彦	59. 10. 29 ~60. 3. 18	古墳3基
5	石本遺跡	集落跡	// 大字牧小字 段・岩田	辻本 和美 竹原 一彦	59. 5. 8 ~ 9.30	竪穴式住居9基·溝· 方形周溝墓
6	多保市城跡	城館跡	ル 多保市小字 打越	伊野 近富山下 正	59. 5. 7 ~60. 3.30	中世墳墓群
7	奥谷西遺跡	集落跡	ル 大字大内小 字奥谷	藤原 敏晃岩松 保	59. 5. 7 ~60. 3.30	竪穴式住居7基・溝 ・井戸状遺構
8	薬王寺古墓	古 墓	ル 多保市小字 薬王寺	伊野 近富山下 正	59. 10. 22 ~10. 29	集石遺構
9	和田賀遺跡他	散布地	福知山市大字長田小 字和田賀・前ケ嶋他	三好 博喜	59. 11. 8 ~60. 3. 8	土師器・須恵器・古銭が出土。
10	青 野 遺 跡	集落跡	綾部市青野吉美前	森下 衛三好 博喜	$\begin{vmatrix} 60. & 3. & 7 \\ \sim & 3. & 30 \end{vmatrix}$	竪穴式住居1基・溝 4・土址13
11	味方遺跡	散布地	〃 味方町中ノ坪	辻本 和美	59.12.13 $\sim 60.3.30$	竪穴式住居 • 掘立柱 建物 • 柵列
12	小金岐古墳群	古 墳	亀岡市大井町小金岐	田代 弘村尾 政人	59.12.3 $\sim 60.3.27$	横穴式石室
13	千代川遺跡第 7次	集落跡	// 千代川町千原	森下 衛	$ \begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	足 跡
14	千代川遺跡第 8次	11	// 大井町小金岐 北浦	村尾 政人	$59. \begin{array}{c} 7.26 \\ \sim 8.30 \end{array}$	素掘り溝・柱穴
15	千代川遺跡第 9次	官衙跡	ル 千代川町北ノ 庄	森下 衛村尾 政人	59. 8.27 ~12.12	墨書土器・緑釉陶器が出土
16	北金岐遺跡	集落跡	// 大井町北金岐	田代 弘	59. 11. 5 ~12. 20	溝·掘立柱建物·土 坛
17	篠窯跡群	窯跡	# では、 // では	水谷 寿克 竹井 治雄 岡崎 研一	59. 5.17 ∼60. 3.27	窯跡・窯状遺構・溝 ・柱穴
18	上中遺跡	散布地	北桑田郡京北町大字 赤石・小字鳥谷・小 迫口16・17	増田 孝彦	$59. \ \overset{8.}{\sim} \overset{1}{9.25}$	溝2条
19	長岡京跡左京 第115次	都城跡	長岡京市神足小字大 張・雲宮・麦生 他	長谷川 達三好 博喜	59. 9. 21 ~10. 23	溝5条・土拡3
20	長岡京跡左京 第118次	11	向日市森本町小柳22 ~30,鶏冠井町十相	長谷川 達石尾 政信	59.10.18 $\sim 60.2.14$	掘立柱建物10棟・井 戸1・土広2
21	長岡京跡左京 第119次	11	ル 上植野町西大 田	山口 博	$59.10.12$ ~ 11.30	三条大路北側溝・わだち
22	長岡京跡右京 第165次	11	長岡京市開田二丁目	山口 博三好 博喜	$59.6.23$ ~ 7.26	西一坊大路東西両側溝
23	長岡京跡右京 第171次	"	// 今里四丁目	石尾 政信 三好 博喜	59. 7. 9 ~10.13	西二坊大路東側溝
24	平安京跡	"	京都市北区大将軍坂田町	山口 博	59. 7. 19 ~10. 11	掘立柱建物·溝
25	奥山田池遺跡	散布地	綴喜郡田辺町三山木 奥山田	増田 孝彦	59.12.19 $\sim 60.3.29$	須恵器・土師器・瓦 片が出土
26	隼上り遺跡	11	宇治市菟道東隼上り	小池 寛 史	59.6.18 $\sim 60.3.30$	土城・青磁椀・漆器 等が出土
27	隼上り古墳	古 墳	// // 隼上り	小池 寛 党	59.10.18 $\sim 60.3.30$	横穴式石室
28	燈籠寺遺跡	散布地	相楽郡木津町内田山	戸原 和人	59. 8. 1 ~10.30	古墳周濠
29	木津川河床遺 跡	集落跡	八幡市八幡字一丁畑 ・針ノ内 他	黒坪 一樹	$59. \ 4.17$ ~ 5.10 $59. \ 6.1$ ~ 10.12	掘立柱建物・溝状遺 構
30	市坂 1•4 号墳 他	古墳他	相楽郡木津町木津 · 市坂	戸原 和人 小山 雅人 黒坪 一樹	59. 12. 1 ~60. 3. 29	掘立柱建物・瓦溜り

昭和59年度 発掘調査実施遺跡一覧表

5 石本遺跡は、由良川・牧川合流点近くの牧集落南側の水田地帯に位置する集落遺跡である。時期は古墳時代が中心であるが、弥生時代や奈良・平安時代の遺物も出土している。弥生時代の遺構としては方形周溝墓の区画溝や埋葬のための土城を検出した。古墳時代のものは竪穴式住居跡 9 基を検出したが、中には住居内の一辺の中央や隅に馬てい形の竈をもつ住居跡がある。出土遺物はかなりの数にのぼるが、古墳時代後期の溝から出土した木製品は180点にものぼっており、集落を考える上で重要な資料になる。

6多保市城跡は、竹田川・土師川の合流点にあって、江戸時代の『丹波志』には「打越城」と記されている。 昨年度は4か所を調査し、「打越城」に関連する遺構は検出できなかったが、中世墳墓群がみつかった。土城の中央に納骨した石を並べたものや方形に溝を掘って納骨し石を置いた埋葬例が多かった。いずれも鎌倉時代後期に比定される。

7 奥谷西遺跡は、前記多保市城跡と土師川を挟んだ対岸の丘陵上にあって、弥生時代~ 古墳時代の集落跡である。弥生時代の溝2、竪穴式住居跡7、古墳時代の溝1、竪穴式住 居跡6、土城1を検出した。そのほか、平安時代以降の溝や井戸状遺構等も検出している。 中でも古墳時代後期の土城からは、須恵器の杯蓋と鉄製U字形鋤先が2個組み合わさった 形で出土しており、貴重な資料を得ている。

8 薬王寺古墓は、上記多保市城跡と同一丘陵上に立地し、当初角礫を検出したことから中世墓ではないかと考えられていた。しかし、遺物が出土せず、明治にこの付近で採石が行われた事実から、古墓ではなく、単なる集石の跡と判断されるに至った。

9 和田賀遺跡,前ケ嶋遺跡,仲堤遺跡は土師川右岸にあって,同河川改修工事に先立って実施した調査である。三遺跡とも連続したところなので一括して扱う。この地域は各時代の遺物が散布する地域として知られていたが,土師器・須恵器・陶磁器・古銭・釘が出土した程度で,いずれも顕著な遺構はみつからなかった。

10青野遺跡は、由良川流域に立地した弥生時代~古墳時代の集落跡である。今回は、隅丸方形の竪穴式住居跡(古墳時代前期)1基を検出したほか、溝4条、土城13を検出している。また、柱穴と考えられるピットも多数あるが、今年度も引き続き調査を実施する予定なので、詳細は今後に譲りたい。

11味方遺跡は、由良川が綾部盆地で南に向って流路を変える地点の右岸にあって、縄文・弥生時代の石器や弥生土器、古墳~奈良時代の須恵器や土師器の散布地として知られていた。調査の結果、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・柵列・土城・柱穴等多くの遺構を検出した。竪穴式住居跡では、弥生時代の円形住居跡以外に、古墳時代後期のものでこの辺でよくみられる方形住居跡(青野型)も検出されている。出土遺物としては、縄文・弥生時代の石器のほかに、弥生土器・土師器・須恵器も多量に出土しており、大きな成果を得た。

12小金岐古墳群は、亀岡盆地西側の行者山裾に立地する古墳時代後期の群集墳で、59年度は1号墳・3号墳と7号墳墳丘の調査を実施した。1号墳・3号墳はいずれも横穴式石室で、1号墳石室は残存状態がよく、奥壁が横積み、側壁は横積みと縦積みにしている。床面には石が敷かれており、石室主軸に直交する奥壁を高くするだけでなく、T字型に玄室部を3つに分けるという珍しい形態をしていた。3号墳石室は半壊の状態で、左側壁と右側壁の一部を残すにすぎなかった。出土遺物としては、須恵器・土師器以外に土玉・金環・鉄製品があり、比較的遺存状態がよかった。

13千代川遺跡第7次調査は、府道北ノ庄・千代川線拡幅工事に伴い、弥生時代から古墳時代の集落跡である同遺跡の一部を調査した。昨年度は弥生時代中期の溝2条や足跡を検出した。

14千代川遺跡第8次調査は、丹波養護学校亀岡分校校舎新築に伴うもので、素掘溝やピットを検出した。遺物としては、土師器片・須恵器片・瓦器片・陶磁器片等が出土したにすぎず、千代川遺跡の中心である弥生時代~古墳時代の遺構・遺物はみつからなかった。

15千代川遺跡第9次調査は、国道9号バイパス建設工事に伴うもので、千代川遺跡のみならず、奈良~平安時代の丹波国府跡の比定地の調査でもある。調査では奈良~平安時代の遺構や国府関連の遺構を検出することはできなかったが、遺物は大量に出土している。 墨書土器や緑釉もかなり出土しており、このあたりが官衙であった可能性が高い。中でも、 墨書土器には「小家」「田邊」「吏」と書かれたものもあり、この地域の特殊性を示す資料といえる。

16北金岐遺跡は、当調査研究センターが昭和57年度から発掘調査を進めている遺構で、 58年度調査では弥生時代末~古墳時代の集落跡を検出している。昨年度は400m²と掘削面 積は小さかったが、溝・掘立柱建物跡・土拡・ピット等を検出した。遺物としては平安時 代~鎌倉時代頃の土師器皿・瓦器片等が出土している。

17篠窯跡群は、亀岡市篠町に所在する須恵器窯跡で、試掘調査を除くと、西長尾A地区作業場跡・黒岩作業場跡・芦原3,4号窯の計3か所の調査を実施した。西長尾A地区作業場跡では、柱穴・溝・土拡状遺構を検出した。柱穴は建物になるようで、溝と共に9世紀中頃に比定される。土拡状遺構は性格が不明だが、中に焼土や炭が堆積しており、やはり9世紀中頃の須恵器が出土する。黒岩作業場跡では、窯状遺構・溝状遺構・土塩・ピット群を検出した。出土した遺物は、須恵器・緑釉陶器・石鏃等があるが、土器類は黒岩1号窯併行期のものである。これらは作業場跡とあるとおり、何らかの窯業生産に関係した遺構であると考えられる。芦原3号窯・4号窯は窯跡であって、3号窯の方は池と山道によって削平され、登窯の焼成部のみしか残っていなかった。4号窯は窯体・灰原ともみつからず、

炭の堆積を確認したにとどまった。

18上中遺跡は、古墳時代~鎌倉時代にわたる複合遺跡で、北桑田郡京北町の谷川沿いに 立地する。昨年度は溝2条検出した以外、若干の遺物(須恵器・瓦器等)が出土した程度に すぎなかった。昨年度は調査地の周辺散布調査を実施し、かなり広範囲にわたって古墳時 代~鎌倉時代の土器類の散布が認められた。

19長岡京跡左京第115次調査は、国道171号線歩道設置工事に伴い実施したもので、調査地は長岡京左京五条二坊および六条二坊に比定される。調査はトレンチを4本入れて掘削し、溝5条・土拡3を検出した。遺物はほとんど出土せず、溝の1つから弥生土器・須恵器・土師器が混在して出土したにすぎなかった。

20長岡京跡左京第118次調査は、向日市民体育館建設工事に伴うもので、左京一条二坊十町・十一町にあたる。今回の調査は約5,000㎡と広大な地域を対象にしており、長岡京南一条条間大路をはじめ、長岡京時代の掘立柱建物跡10棟・井戸1・土城2を検出した。出土遺物も多岐にわたっており、土師器・須恵器・瓦・土製品のほか、鉄器・銭貨(「和同開珎」「萬年通寳」「神功開寳」)・木製品も出土している。墨書土器も多く、中には「内膳」「厨」「楊」と記したものもあれば、「九」「メ」等意味不明のものもある。木製品として注目すべきものは「木印」である。木印は個人印の可能性があり、全国的にも珍しい出土例となっている。

21長岡京跡左京第 119 次調査は、府立向陽高等学校トレーニングルーム建設工事に伴うもので、長岡京左京三条二坊・四条二坊にあたっている。かつてここでは三条大路が検出されたが、この調査でも三条大路北側溝を検出している。また、わだちと考えられる細い溝状遺構も検出しており、長岡京造営時の工事のあり方を考える一資料となっている。 版力 進力 進力 (「□□□壹村□」)をはじめ、円面硯・転用硯・墨書土器(「福」「家□」「廣」等)などもある。

22長岡京跡右京第165次調査は、推定西一坊大路上に調査地があり、これより南の地ですでに一部検出されている。調査の結果、西一坊大路の東西両側溝を検出し、長岡京時代の土師器や須恵器がまとまって出土した。

23長岡京跡右京第171次調査は、外環状線建設工事に伴うもので、推定西二坊大路上にあたっている。この地のすぐ南側にはかつて今里車塚古墳が存在し、弥生~古墳時代にかけての集落跡も検出されている。今回の調査では、長岡京西二坊大路東側溝を検出したほか、弥生時代の竪穴式住居跡も検出した。また調査地の南端部には大きな溝があり、そこから古墳時代後期の須恵器や土師器が出土している。この溝は古墳の周濠の可能性があり、今里車塚古墳との関係等、今後解明しなければならない課題を得た。

24平安京跡は、府立山城高校の校舎増設等に伴うもので、右京一条三坊九町と十町の北半分にあたる。ここでは昭和54・55年度に京都府教育委員会が平安時代初期の貴族の邸宅を検出している。調査では、奈良時代の掘立柱建物跡のほか、邸宅の東を区画する溝等を検出した。遺物は、平安時代初頭の須恵器・土師器を中心に出土しているが、少量ながら古墳時代の遺物も出土した。

25奥山田池遺跡は、田辺町を北流する木津川左岸の丘陵中にあって、奈良時代頃の須恵器・土師器・瓦片が採集される所として知られていた。調査では須恵器や瓦が出土し、周辺に窯跡があると推定されたが、窯体はみつからなかった。遺物もこれらのほか、塼や軒平瓦もあり、近くの興戸廃寺に供給された可能性も考えられる。

26年上り遺跡・27年上り古墳は、宇治市菟道にあって、昭和57年度には宇治市教育委員会が飛鳥豊浦寺の瓦を焼成した瓦窯を発掘調査している。当調査研究センターは昭和58年度から、京滋バイパス建設に伴って発掘調査を進めてきた。26・27とも同じ地区にあるので一括して述べる。主な検出遺構は古墳2基・中世墓1で、古墳の石室はいずれも片袖式横穴式石室である。古墳出土遺物は、須恵器・金環・鉄釘のほか、鉄刀もでている。いずれも古墳時代後期の遺物である。中世土拡は、長軸185cm・短軸65cmの隅丸長方形で、ここから青磁椀2・燈明皿1・鉄釘30・漆器1等が出土した。青磁椀は2点とも完形品で、中国龍泉窯(福建省)で焼かれたと考えられている。しかも、2つが重なって出土し、その間に漆器の皿が入っていた。あるいはこの3枚が1つの木箱に入れられて埋納されたのかもしれない。

28燈籠寺遺跡は、木津川左岸の内田山丘陵にあって、土器や埴輪が発見されていた。当調査研究センターは、昭和56年度にこの地を調査し、古墳を1基検出している。今回の調査では、調査地東端部でL字状に屈曲した溝を検出し、ここから円筒埴輪・家形埴輪が出土したほか、上層から奈良時代頃の須恵器・土師器もみつかっている。この溝は出土の埴輪などから古墳時代中期の古墳(方墳か)の周濠である可能性が強い。

29木津川河床遺跡は、木津川中流域に営まれた弥生時代後期から鎌倉時代にわたる集落 跡として知られている。当地の調査は昭和57年度からはじめたが、58年度には6世紀後半 の竪穴式住居跡群を検出している。昨年度は、鎌倉時代から江戸時代に至る溝状遺構を多 数検出したほか、掘立柱建物跡(時期不詳)もみつかった。遺物は、土師器皿・羽釜・須恵 器細片・瓦質土器片等がほとんどであった。

30市坂1・4号墳,赤ケ平遺跡,釜ケ谷遺跡,上人ケ平遺跡は,木津ニュータウン建設 工事に伴って実施した発掘調査で,燈籠寺遺跡の所在する丘陵以南の地にある。市坂1号 墳は国鉄関西本線のため半分以上消滅しているが,墳丘をまわる溝を検出しただけでなく 埴輪片も出土した。市坂4号墳には明確な遺構はなかった。赤ケ平遺跡は、燈籠寺遺跡の 東隣りの丘陵にあって、石器剝片や弥生土器が出土している。釜ケ谷遺跡は燈籠寺遺跡と 赤ケ平遺跡の間の谷筋にあって、奈良時代の須恵器・土師器・土馬や鎌倉時代の瓦器椀・ 羽釜などが出土している。上人ケ平遺跡は市坂1・4号墳の近接地で、3本の溝を検出し た。そのうちの1本には大量の瓦片が入っており、中に軒丸瓦1点と鬼瓦1点があった。 いずれも平城宮跡から類似のものが出土している。また、奈良時代の掘立柱建物跡を1棟 検出したが、その柱穴から軒丸瓦2枚が出土した。このうち1枚は東大寺で使用された瓦 であり、この付近に市坂瓦窯が存在することから、何か瓦窯に関連した施設のようである。

以上、昭和59年度の当調査研究センターが実施した発掘調査の概要を述べたが、詳細は 59年度末の概報に譲るとして、次に京都府下の各機関が行った調査のうち、主なものだけ 述べることにする。

丹後地域では,高浪古墳群(野田川町),扇谷遺跡(峰山町),帯城古墳群(大宮町),蛭子山古墳(加悦町),小虫古墳群(加悦町),田辺城跡(舞鶴市)等の発掘調査が行われた。

高浪古墳群は、野田川町字石川にある横穴式石室墳で、野田川町教育委員会が調査を進めた。この古墳は古くから封土が失われ、石室が露出した状態になっていた。石室は、全長7.6m(玄室長4.6m, 羨道長3m)、奥壁部幅1.9m, 玄門部幅1.1m と比較的大きなものである。この石室は玄室奥壁部が段状になっており、いわゆる石棚をもつ横穴式石室ということができる。出土遺物としては、須恵器・鉄刀・鉄鏃・耳環・管玉・ガラス玉等があった。

扇谷遺跡は、昭和49年から数次にわたって発掘調査が行われ、丘陵斜面に周濠をめぐらせた弥生時代前期末から中期初頭にかけての高地性集落跡であることがわかっている。昨年度の調査は、峰山町教育委員会が国庫補助事業の第3次調査で、周濠内から複数の住居跡と考えられる柱穴群を検出した。また、周濠も二重構造になっており、内堀も検出している。遺物は弥生土器・石鏃・緑色凝灰岩・砥石等が出土した。

帯城古墳群は、竹野川右岸の盆地に向って東西にのびる丘陵の先端部にあって、約15基の埋葬施設が確認された。弥生時代後期の台状墓を2基確認したほか、古墳時代の木棺直葬墓を多数検出している。遺物は弥生時代の高杯のほか、須恵器では杯身・杯蓋のセットが数多く出土した。

史跡蛭子山古墳は、加悦町明石の野田川中流域に位置する。加悦町教育委員会は石棺の 覆屋の改築に先立って発掘調査を実施し、埋葬施設2基(1基は竪穴式石室、今1基は不明)と方形埴輪列一区画が確認された。この古墳はすでに昭和4年の調査で埋葬施設1基 (舟形石棺)とそれに伴う方形埴輪列1区画の存在が明らかになっている。今回検出された 石室は南北方向の墓城の中につくられており、竪穴式石室をとりかこむように12本の埴輪が原位置で発見された。今回出土の12本のうち9本が形象埴輪で、楯形・靱形・家形埴輪などがある。

小虫古墳群は、加悦町教育委員会が国庫補助事業として発掘調査を実施したもので、野田川中流域に位置する。調査の結果、2基の古墳と24基の木棺墓と土城墓を確認した。1号墳は長方形墳で、墓城を掘って2基の木棺を安置し、うち一棺には二体が埋葬されていた。2号墳は楕円形の円墳で、割竹形木棺を安置していたらしい。この2号墳の下層から24基を数える木棺墓群がみつかったが、大半は弥生時代に属すと考えられている。

田辺城跡は、舞鶴市教育委員会が実施した調査で、二ノ丸堀と石垣を68mにわたって確認している。また、二ノ丸侍屋敷跡も確認した。屋敷跡では、3時期以上の礎石建物・掘立柱建物跡・石組溝・埋め桶・土拡等の遺構が検出され、瓦や陶磁器類等の遺物が出土した。

丹波地域では、和久寺跡(福知山市教育委員会),池ノ奥古墳群(福知山市教育委員会), 福知山城跡(福知山市教育委員会),史跡丹波国分寺跡(亀岡市教育委員会)の発掘調査が行 われた。

和久寺跡は、府北部を代表する奈良時代寺院跡で、第3次調査が福知山市教育委員会の 手で実施されている。主に掘立柱建物跡・築地跡・工房跡・井戸跡等の遺構を検出した。 井戸跡は寺院衰退時のものと考えられているが、築地跡や工房跡については寺院と関係の 深い遺構(掘立柱建物跡を僧房に推定されている)とみられている。出土遺物は瓦が多く、 ほかに須恵器・土師器・黒色土器が出土している。

池ノ奥古墳群は、由良川と土師川の合流する北側の台地上にあって、昭和59年度に引き続いて、6・7号墳の調査が実施された。6号墳は直径26m・高さ1.5mの円墳で、木棺直葬墓であった。また、7号墳も直径14m・高さ0.9mの円墳で、やはり木棺直葬墓であった。遺物は両古墳とも、須恵器杯身・刀子等が出土している。

福知山城跡は、近世城郭として明智氏、有馬氏の手により完成されたもので、福知山市教育委員会が郷土資料館建設に先立って発掘調査を実施した。従来福知山城については関連する史料が少なく、構造については細部がわからなかった。今回の調査では、本丸御殿に関係する礎石列(南北方向、7尺間隔)を検出したほか、修復前の旧石垣・大天守と続櫓の境を示す石列等の遺構がみつかっている。出土遺物は多岐にわたっているが、瓦当・白磁片・陶器片・銅銭・石仏・石臼等が出土している。福知山城の石垣には、現存のものでも五輪塔等をつみあげており、今回の結果とあわせて築城の状況を推定する資料になりうる。

史跡丹波国分寺跡は、亀岡市千歳町国分にあって、昭和47年~55年にかけて発掘調査され、伽藍の規模・配置等が明らかにされた。昨年度の調査では、塔跡の基壇を掘削し、乱

積基壇の痕跡と雨落溝が検出された。そのほか、伽藍中軸約72mのところで築地状遺構が みつかり、更に中軸線から東 110m のところで工房跡も発見されている。出土遺物は主に 瓦で、軒丸瓦・軒平瓦が多く出土している。

京都市内では、京都大学医学部構内の遺跡(京都大学埋蔵文化財センター)、京都大学医 学部附属病院構内の遺跡(京都大学埋蔵文化財センター)、新島襄旧邸内新島会館地点(同 志社大学校地学術調査委員会)、蟹ケ坂瓦窯((財)京都市埋蔵文化財研究所)等の発掘調査 が行われたが、ここでは蟹ケ坂瓦窯のみとりあげたい。

蟹ケ坂瓦窯は、賀茂川右岸の段丘上部にあって、中学校建設に先立って、(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施した。調査の結果、4基の瓦窯とそれに伴う溝2条が検出された。 $2\cdot 3\cdot 4$ 号窯は遺存状態がよく、 $2\cdot 3$ 号窯は天井部も残っていた。溝は1条が4号窯を囲むようにあり、もう1本の方は1~3号窯をとりまく円状のものもあった。これらの溝は瓦窯内への地下水流入を防ぐのを目的として掘削された。遺物は、灰原が削平されていたため少なかったが、瓦がかなり出土した。瓦のうち軒丸瓦をもつものは6点あり、上御霊神社境内から同笵の瓦が出土している。ほかに10数片程度の須恵器片が出土している。

乙訓地域では,長岡京関係(向日市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・大山 崎町教育委員会),勝竜寺城跡((財)長岡京市埋蔵文化財センター),神足遺跡・神足古墳 ((財)長岡京市埋蔵文化財センター),物集女車塚古墳(向日市教育委員会),山崎津跡(大山 崎町教育委員会)の発掘調査が実施された。

長岡京跡関係で注目すべき成果をあげたのは、向日市教育委員会が実施した左京第120次調査である。長岡京期の溝5条・掘立柱建物跡3棟・井戸1基・土広・柱穴群を検出した。溝5条のうち、東二坊第一小路の東西両側溝・二条大路南北両側溝が入っており、それぞれの道路の幅が判明した。遺物は、須恵器・土師器・瓦・土馬・鴟尾・釘・銭貨等が出土している。また、「給服所」と書かれた墨書土器も出土しており、そのような役所が近くにあったと推定されている。

勝竜寺城跡は、長岡京市神足にあって、細川藤孝の城の1つとして著名なものである。 今回は、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが宅地開発に伴って実施した調査で、土塁・空 堀等を検出している。出土遺物も多くあり、陶磁器類・瓦器・古銭のほか、須恵器・土師 器も出土した。

神足遺跡・神足古墳は、勝竜寺城として調査したところと同じ場所で、その下層遺構に

あたり、土塩基群(弥生時代中期)、掘立柱建物跡・竪穴式住居跡(6世紀後半)がみつかっている。遺物としては、弥生土器・土師器・須恵器のほかに、弥生時代の磨製石剣・扁平 片刃石斧等がみつかっている。

物集女車塚古墳は、物集女街道沿いにある前方後円墳で、向日市教育委員会が環境整備計画に基づいて発掘調査を行った。横穴式石室の規模は玄室長約5m,幅約2.4m~2.7m,高さ約2.9m,羨道部長約6.7m,幅約1.4mで、排水溝を石室に沿って四角く設けている。玄室の奥には組合せ式家形石棺があり、長さ約2.3m・幅約1.3m・高さ1mの規模で、二上山の白石とよばれる凝灰岩でできている。墳丘には葺石を配し、埴輪列を立てており、出土した須恵器等とともに、6世紀前半に築造されたと考えられている。

山崎津跡は、西国街道から東方約50mの地点にあり、大山崎町教育委員会が遺跡確認調査のため行ったものである。山崎津は山陽道に面したところにあって、都城の外港として存在した。紀貫之の『土佐日記』にもみえ、今回、はじめてその位置が判明した。遺構としては河道・舟入り状遺構が検出された。舟入り状遺構と河道は接続しており、遺物も銭貨・須恵器・土師器・緑釉陶器などが出土した。

南山城地域では、大鳳寺跡(宇治市教育委員会),田辺遺跡(田辺町教育委員会),平野山 瓦窯跡(八幡市教育委員会),高麗寺跡(山城町教育委員会),恭仁宮跡(京都府教育委員会) 等の発掘調査が行われた。

大鳳寺跡は、7世紀後半に創建された寺院で、宇治市菟道に位置する。調査の結果、当遺跡がみつかり、その基壇は瓦積基壇であることが判明した。しかも、基壇南側には幅約0.9mのはり出し部があり、特殊な二重基壇を構成していた。出土遺物は瓦を中心に軒丸瓦や鬼板があり、創建時から平安時代にかけての3時期に区分されている。

田辺遺跡は、田辺町田辺にあって、土器散布地として知られているところである。主に 奈良~平安時代の墓域であることが判明した。また、近くには中世田辺城跡もあり、田辺 町教育委員会が発掘調査したところ、建物の柱根があり、火災のあとも発見された。この 田辺城跡のある丘陵先端から弥生時代の方形台状墓が検出され、墓坑内から鉄剣が出土し ている。また、方形台状墓の東南隅からは甕棺もみつかっている。

平野山瓦窯跡は、八幡市橋本平野山88にあって、大阪四天王寺の瓦を生産した瓦窯として知られている。7基確認された瓦窯のうち、2~7号窯までが調査対象になった。窯跡はいずれも地下式登窯で、大量の瓦や須恵器が出土した。調査の結果、操業年代は7世紀前半で、いずれも瓦陶兼業窯であることがわかった。出土した軒丸瓦・軒平瓦等も伴出した須恵器から7世紀前半のいわゆる飛鳥様式で、瓦編年上でも絶対年代を確定できる貴重な資料を得た調査であった。

京都府埋蔵文化財情報 第16号

高麗寺跡は、山城町上狛にあって、法起寺式伽藍配置をもつ飛鳥・白鳳時代の寺院跡である。調査では講堂跡・回廊跡・築地跡・旧河道等の遺構を検出した。講堂はこれまで規模が不明であったが、東西4間、南北4間の4間庇の建物であったことが判明した。回廊も基壇幅5.4m・梁行3mの単廊で、講堂脇中央の南よりにとりつくことがわかった。

恭仁宮跡は、京都府教育委員会が昭和48年度から計画的に発掘調査を進めてきた。昨年度は、朝堂院地域を調査地として多数の掘立柱建物跡が検出された。特に朝堂院第6堂推定地では掘立柱建物3棟が検出され、他の諸宮とは大きく異なる結果を得ている。今後、恭仁宮の建物配置を考える上で貴重な成果を得ている。

以上、昭和59年度京都府下で実施された発掘調査のうち、主なものについて略述したが、 詳細については各報告書・現地説明会資料を参照されたい。

(土橋 誠=当センター調査課調査員)

参考文献·参考資料

『京都府埋蔵文化財情報』第13号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984・9

『京都府埋蔵文化財情報』第14号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984・12

『京都府埋蔵文化財情報』第15号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985・3

「石本遺跡」(京埋セ現地説明会資料 No.84-03) 1984・8

「隼上り遺跡」(京埋セ現地説明会資料 No.84-04) 1984・9

「奥谷西遺跡・多保市城跡 | (京埋セ現地説明会資料 No.84-05) 1984・10

「長岡京跡左京第118次」(京埋セ現地説明会資料 No.85-01) 1985・1

「隼上り遺跡」(京埋セ現地説明会資料 No.85-02) 1985・1

「小金岐1·3·7号墳」(京埋セ現地説明会資料 No.85-03) 1985・3

「長岡京跡右京第165次」(京埋セ中間報告資料 No.84-04) 1984・6

「長岡京跡右京第171次」(京埋セ中間報告資料 No.84-05) 1984・10

「燈籠寺遺跡第2次」(京埋セ中間報告資料 No.84-06) 1984・10

「木津川河床遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.84-07) 1984・10

「石本遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.84-08) 1984・10

「長岡京跡左京第119次」(京埋セ中間報告資料 No.84-09) 1984・11

「志高遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.85-02) 1985・3

「波江3·4·5号墳」(京埋セ中間報告資料 No.85-03) 1985・3

「奥山田池遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.85-04) 1985・3

「木津地区所在遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.85-05) 1985・3

「味方遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.85-06) 1985・3

「小虫古墳群」(『加悦町文化財調査概要』 3 加悦町教育委員会)1985

「蛭子山古墳」(『加悦町文化財調査概要』 4 加悦町教育委員会) 1985

「高浪古墳発掘調査概報」(『京都府野田川町文化財発掘調査報告』第1集 野田川町教育委員会)1985

「池ノ奥古墳群」(『福知山市文化財調査報告書』第7集 福知山市教育委員会)1985

「和久寺跡」(『福知山市文化財調査報告書』第8集 福知山市教育委員会)1985

「史跡高麗寺跡」(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第1集 山城町教育委員会)1985

「扇谷遺跡」(現地説明会資料 峰山町教育委員会) 1984・8

「帯城古墳群発掘調査」(現地説明会資料 京都府教育委員会) 1984・9

「田辺城跡」(現地説明会資料 舞鶴市教育委員会) 1984・12

「福知山城跡」(現地説明会資料 福知山市教育委員会) 1984・9

「史跡丹波国分寺跡 第3次発掘調査」(現地説明会資料 亀岡市教育委員会)1984・12

「蟹ケ坂瓦窯発掘調査地説明会資料」(現地説明会資料 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1984・4

「勝竜寺城跡」(現地説明会資料 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984・7

「神足遺跡・神足古墳」(現地説明会資料 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984・8

「物集女車塚古墳」(現地説明会資料 向日市教育委員会) 1984・9

「長岡京跡第120次 (7ANFZN-2地区)」(現地説明会資料 向日市教育委員会) 1985 · 2

「田辺遺跡」(現地説明会資料 田辺町教育委員会) 1984·6

「田辺遺跡・城跡」(現地説明会資料 田辺町教育委員会) 1984・10

「大鳳寺跡第5次発掘調査」(現地説明会資料 宇治市教育委員会) 1984・9

「昭和59年度恭仁宮跡発掘調査概要」(現地説明会資料 京都府教育委員会) 1985 • 2

「平野山瓦窯跡発掘調査」(現地説明会資料 八幡市教育委員会) 1985·2

亀岡市小金岐1・3・7号墳の調査

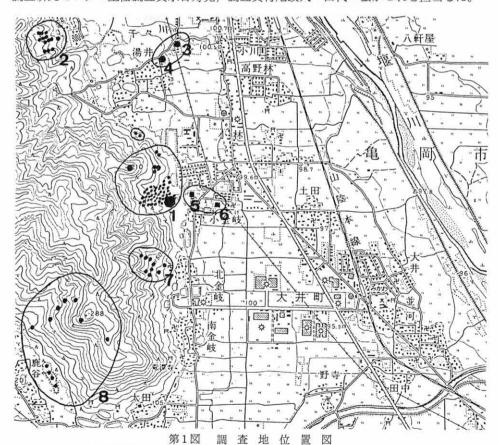
田 代 弘

調査期間 昭和59年12月3日~昭和60年3月27日

調査面積 約 800㎡

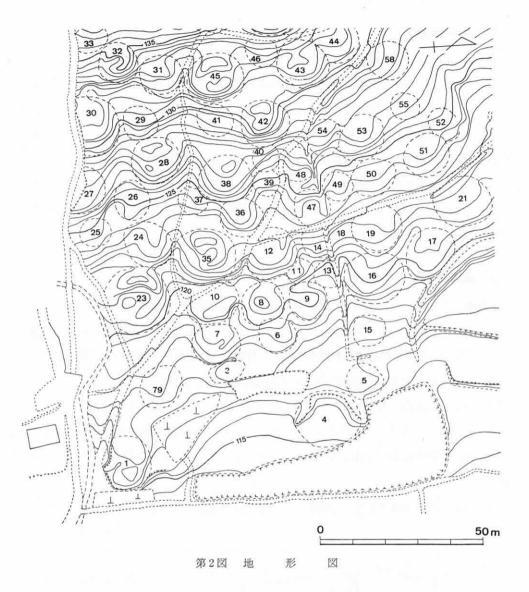
1. はじめに

今回の調査は、国道9号バイパス建設に伴う農道移設工事に先立つ発掘調査である。建 設省近畿地方建設局の依頼を受け、当調査研究センターが実施した。調査にあたっては当 調査研究センター主任調査員水谷寿克,調査員村尾政人・田代 弘がこれを担当した。



- 1. 小金岐古墳群 2. 北ノ庄古墳群 3. 丸塚古墳 4. 丸塚西古墳

- 5. 馬場ケ崎2号墳 6. 馬場ケ崎1号墳 7. 北金岐古墳群 8. 鹿谷古墳群



小金岐古墳群は、亀岡盆地の西側を南北に連なる行者山裾に位置する。京都府教育委員会がおこなった分布調査では78基が確認されている。行者山東麓には、北金岐古墳群・鹿谷古墳群をはじめ北ノ庄古墳群・拝田古墳群・上川関古墳群等多数の古墳群が知られているが、当古墳群はなかでも最も数が多く密集度が高い。いわゆる「密集型群集墳」の特徴をもっている。昭和50・51両年度には、12地点8基が発掘調査され、群形成が六世紀後半にあり、七世紀前半で終焉にむかうことが明らかにされている。

今回は、農道建設地域内に存在する1・3・7号墳の3基について発掘調査を実施した。 調査過程で新たに1基を確認したので、総計4基を調査したことになる。

2. 調査経過

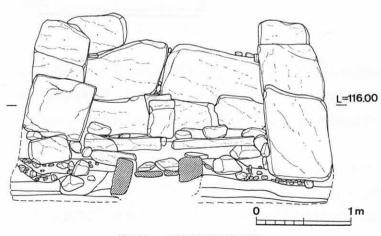
昭和59年12月3日から樹木の伐採及び下草刈りを始め、昭和60年1月11日に地鎮祭を行い、同月17日から掘削を開始した。調査対象は1・3・7号墳の3基であったが、7号墳については、墳丘東裾の一部にのみ道路工事が及ぶため、墳丘だけの調査となった。7号墳に隣接する3号墳は、すでに墳丘の東側半分が土取りのため大きく抉られていた。1号墳は、小金岐古墳群中もっとも墳丘規模の大きいものであり、墳丘部に南北方向のトレンチを設定し、露出した石室を中心に掘削した。なお、最後に墳丘の調査と並行して、1号墳と3・7号墳の中間部分の平坦地の試掘を実施したところ墳丘区画溝とみられる溝状遺構を確認した。これを新たに79号墳と名づけた。

3. 遺構の概要

1号墳 小金岐古墳群中もっとも南に位置する。当古墳群の古墳は、尾根の稜上の平坦面を利用して裾を接し合い、連珠状に連なって造営される傾向がみられるが、1号墳は隣接する古墳との間にある程度の距離がみられ、単独墳的様相を示す点が特異である。主軸を N-12°30′-E におき、南南西に開口する横穴式石室を内部主体とする。

墳丘は、封土流出、後世の石抜き等による破壊によって旧状が大きく損なわれており、 規模・形状等については明確でなかった。断ち割り調査の結果、墳丘基底部からの残存高 約3.5m,径20m以上の円墳であることが明らかとなった。外護列石等の外表施設は、検 出していない。

石室は、全長約9mにわたって検出した。墳丘同様大きく破壊されており、羨道部側壁

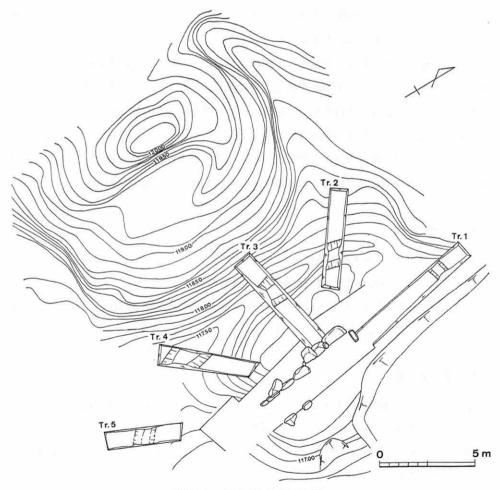


第3図 1号墳玄室見通し図

の一部と床面下に設けられた排水施設, 玄室は床面下と側壁 第一段を残すばかりであった。ただし, 床面・排水施設については思いのほか残存状態が良好であったため,予想以上の成果を得ることができた。以下,玄室な らびに羨道部排水溝について略述する。

(玄室) 現存長約4m・奥壁幅約2m・現存高約1.3mを測る長方形の石室である。袖石は抜きとられていたが、抜き取り痕の形状から玄門が右に偏した両袖をもつものと推定される。奥壁は横積み、側壁は縦積みを併用し、長大な石材を用い側壁を構成する。床部は扁平な加工材を全面に敷きつめ屍床とする。床面敷石は、石室主軸に直交する奥壁部分幅約80cmのみを全体より数cm高く構築し、埋葬における主体的空間を作りだす。床面には次いで加工石材をT字形に配置することにより棺障状をなす遺構を形成し、石室空間を三分割している。

玄室敷石をはずしたところ、板状列石が現れた。これは敷石の下部構造をなすと同時に、 玄室基底に僅かだが空間を形成し、集水と排水の機能を担うものである。玄門部で、羨道 部排水溝に連接していた。



第4図 3・7号墳地形図

京都府埋蔵文化財情報 第16号

(美道)約5mにわたって検出した。幅は約1.2mを測る。側壁は、抜き取り痕を明瞭にとどめないことから比較的こぶりの石材を横積みしたものと思われる。床面は全壊しているために形状は明らかではないが、玄室同様に敷石をもつらしく板材の散乱がみられた。また、床面下中央において暗渠排水施設を確認した。排水施設は一条の溝状遺構で側壁・天井部・溝底を割石によって形成し、断面U字状を呈し羨道部中央を直線的に延び玄門に及ぶ。なお、玄室部では敷石を天井部として床面下にもぐりこみ、玄室内の集水および排水機能を果たしている。

3 号墳 低位の尾根上に裾を接して営まれている古墳群中のひとつで, 群中最末尾に位置する。主軸を $N-10^{\circ}30'-W$ におき南南東に開口する横穴式石室を内部主体とする円墳である。

墳丘は封土流失、土地利用のため大半が破壊されているが、尾根基端部側は比較的残りが良好であった。丘尾を切断し墳丘区画とすると同時に排土を盛土として用い、低平な楕円状を呈する。墳丘裾には、わずかに列石を配する。

石室は半壊状態で左側壁と右側壁の一部が残存する。石室残存長6.3m・玄室長2.9m・ 羨道長3.4m・現存高は約1.2mを測る。玄室羨道長ともに最下段の石はすべて小口を下 に据える縦積みであり、それぞれの石材間に小自然礫を挿入する。玄室部第二段以上の状 況は明らかでないが、最奥部を除き最下段の上面のレベルをそろえている。羨道部は玄門 の石から二石までは縦積みであるが三段目からはやや小さな石を横積みし、玄門の石の上 面に揃える。石材の長さ、幅はやや不統一で、壁面を構成する面のみ面とりを行う。

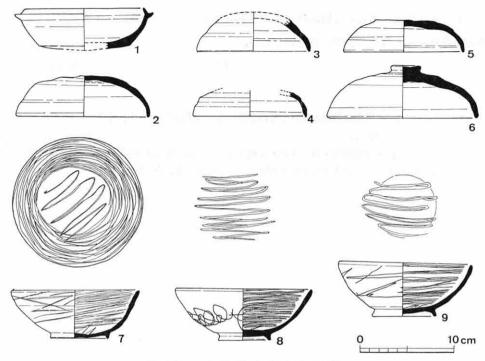
4. 出土遺物

1号墳 須恵器(杯身・杯蓋破片),土師器,土玉,ガラス小玉,金環2,鉄製品(鏃・ 刀子・留金具・不明鉄製品),滑石製紡錘車,瓦器椀等

3号墳 須恵器(杯身・杯蓋・高杯・聴・壺体部・提瓶), 土師器(甕), ガラス玉, 金環 3, 鉄製品, 黒色土器, 瓦器, 土師皿等

5. ま と め

今回は小金岐古墳群中の1・3号墳について内部主体に及ぶ発掘調査を行い、7号墳については墳丘裾部の確認調査を行った。調査の結果、1・3号墳は6世紀末葉に構築された横穴式石室墳であることが明らかとなり、7号墳は裾部を共有する3号墳に先行する横穴式石室墳であることが判明した。中でも、巨石を用いて石室を構築し床面に敷石と排水溝を有する1号墳の確認の意義は大きい。また、79号墳は3・7号墳に類した円墳である



第5図 1号增石室内出土遺物

可能性が高い。

以下, 今回の調査を要約する。

① 1号墳は推定墳丘20m以上をもつ円墳で、巨石を用いて長大な石室を構築する。床面には板石を持ち、玄室空間分割を目的とする棺障状遺構が配されていた。床面下には割石組による暗渠排水溝が整然と設けられ、羨道下中央を直線的に石室外方へと延びる等々の顕著な特徴が見られる。小金岐古墳群中最大の規模をもつと同時に、特異な施設を持つ古墳であることが判明した。築造年代は出土須恵器から六世紀末葉と推定される。

当古墳群では既に調査が行われた 17・71 号墳のように、各支群の先端部に位置している ものは概して大型で、石室の規模も卓越する傾向がある。当該古墳はこうした古墳のひと つであり、そのなかでも墳丘規模・施設の面で更に秀でるものである。

② 3号墳は尾根上に立地する横穴式石室墳で、基部側において7号墳と裾を接している。丘尾を切断し、墳丘区画とすると同時に排土を盛土として利用するタイプの古墳であることが明らかになった。当古墳群においては、この3号墳と同様、尾根稜に連珠状を呈して造営される古墳が数多く見いだされる。かかる古墳の墳丘構築技法を考える上で重要な資料といえる。また、丘尾切断の切り合いの観察によって構築順を窺える可能性を示唆した点でその意義は大きい。

京都府埋蔵文化財情報 第16号

なお、本文作成にあたって同志社大学学生細川康晴君には図面作成・浄書などにおいて 協力を得た。文末ながら感謝の意を表したい。

(田代 弘=当センター調査課調査員)

- 注1 辰巳和弘「密集型群集墳の特質とその背景一後期古墳論(1)—」『古代学研究』100号 古 代学研究会 1983.7
- 注2 堤 圭三郎・安藤信策・樋口隆久・大槻真純「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発 掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1977

昭和59年度発掘調査略報

24. 志 高 遺 跡

所 在 地 舞鶴市字志高小字舟戸

調査期間 昭和59年10月5日~昭和60年3月27日

調査面積 約 2,200m²

はじめに 志高遺跡は、由良川河口から約10km 遡上した左岸に位置し、自然堤防上に立地する(第1図)。昭和55年度から58年度にかけて舞鶴市教育委員会が実施した発掘調査では、縄文~近世の各時代にわたる住居跡や掘立柱建物跡などが検出されており、府下でも最大規模の複合遺跡であることが判明している。

調査概要 今回の調査では調査対象地が広範なため、A区とB区に分けて調査を行った。 A区には、24m×67m の調査地を設け、重機による掘削の後、順次手掘りを繰り返し、弥

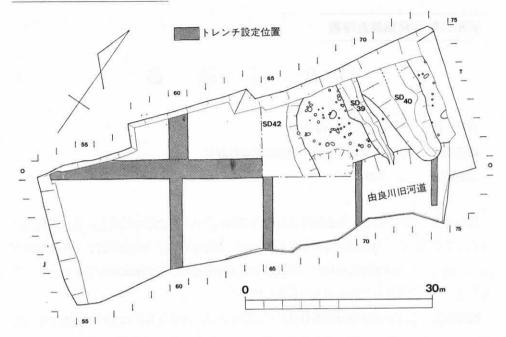
生時代~近世にわたる各時期の遺構を検出した。中世以前では由良川が現在より約20m北側を流れており、調査地の東半部で旧河岸とその堆積土を検出した。また、奈良時代以前は調査地南半で幅40m(推定)の自然河川があったことを確認した。そのため、弥生・古墳時代面での調査は、上記の調査地内のうち、各々480m²に留まった。

B区は、A区の由良川旧河道と 河岸に相当する範囲が調査対象地 であったため、その想定のもとに 重機で一挙に河道内堆積土まで下 げるトレンチを3本設けて、調査 を行った。

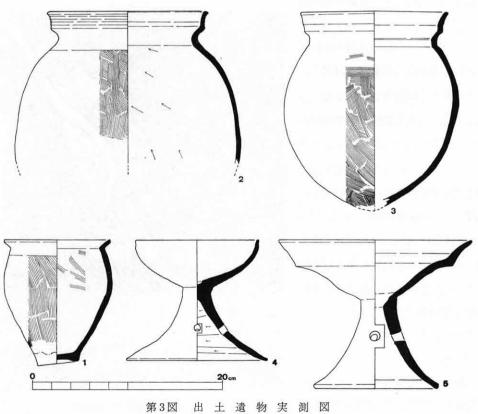
A区での検出遺構は、近世の柱 穴群・土拡等、奈良時代の焼土、



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 古墳時代面檢出遺構平面図



古墳時代の柱穴群・溝,弥生時代の柱穴群・溝・自然流路がある。以下,主要なものの概要を示す(第2図)。

SD39 は、後述する SD40 と一部重複して掘られた溝で、東流している。検出した長さ 15.2m、幅 0.7~3.4m、深さ 0.2~0.7m。 古墳時代。

SD40 は、SD39 とは逆に西流し、由良川から水を「引き込む」傾斜をもつ。人工的に掘削されたものと推測される。出土土器から、弥生時代前期~奈良時代頃まで存続していたことがわかる。埋土最下層中より、管玉・小玉各 1 点が出土している。検出した各部長は、幅 4.0~9.0m、深さ 0.3~1.8m、長さ 16.5m。

SD42 は、現由良川に直交する自然流路で東流する。出土遺物から、弥生時代中期には少なくとも形成されており、奈良時代頃に河川内堆積が進み、その流れを止めたと思われる。66・67ラインで、東側の肩部が検出できたが、0ラインに沿ったトレンチで、それに対応する「立ち上がり」は確認できなかった。これらはすべてSD42 内堆積土と判断した。この自然流路の推定幅が40mを測る。涌水による土砂の流入が夥しく、底面まで検出することができなかったが、断ち割りによる土層観察から深さ1.3m以上を測る。このSD42は、由良川の旧河道かと思われたが、由良川旧河道内堆積層に入れたサブトレンチ(70ライン)とSD42内の土層観察で弥生時代・古墳時代の包含層はそれぞれの河道に流出して堆積した層を確認したことから、併存していたものと思われる。地形・規模から、SD42は、由良川に注ぐ支流もしくは分流と推定する。

出土遺物は、整理用コンテナに約230箱を数えるが、その大半を占めるものは弥生時代後期~古墳時代前期のものである。遺構に伴って出土したものは上述の溝内のものが大多数で、他に包含層内のものは、平安時代頃の堆積層である淡褐色砂層中に包蔵されていたものが多い(第3図)。

まとめ 志高遺跡は、特に弥生時代・古墳時代の集落跡として著名なものであるが、今回の調査では住居跡等の明確な遺構は確認できなかった。これは、先述のように、由良川の旧河岸や自然流路を検出するといった、河川に極めて隣接した空間であったことが要因であると思われる。しかし、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大量の土器の出土と柱穴や溝の存在は、今回の調査地の北西一帯にその時期の住居跡などの集落の中心部が包蔵されていることを推定せしめるのに充分である。また、SD42 や SD40 の下層から装身具類や弥生時代前期の土器片が出土していることは、弥生時代前期に遡る集落の存在を示唆するものと思われる。

さらに、自然流路(SD42)が由良川に注ぐ形で確認できたことは、将来的には、志高遺跡を二分して捉える視点を準備するもので、同遺跡の集落の移動・消長を考える上で重要な要素となってくるであろう。 (岩松 保)

25. 多 保 市 城 跡

所 在 地 福知山市大字多保市小字打越·薬王寺

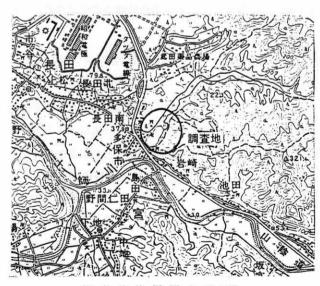
調査期間 昭和59年5月7日~昭和60年3月30日

調査面積 約 5,900m²

はじめに この調査は、近畿自動車道舞鶴線の建設工事に伴う事前調査である。調査地は西方にのびる丘陵上に位置し、発掘に先立って行われた分布調査によって、当丘陵には中世の城館跡である多保市城(打越城)の他に、薬王寺古墳・古墓の存在が知られていた。 多保市城跡は、『丹波志』にもその記述が見えるが、『福知山市史』によれば、居館と詰の曲輪がセットになった城郭として紹介されている。

今回の調査地は、主に丘陵の平坦部にあり、人工的に丘陵をカットして平坦面を作っていることが窺えるため、多保市城の郭が想定されていた。また調査地の所々で土塁状隆起や空堀が見られ、それらが総体として多保市城の城郭を構成するものと考え、調査地をその構成からA~Dの各地区に分けた。以下調査の概要に触れたい。

調査概要 A地点は、丘陵を切断して平坦地を削り出しており、この平坦地(郭)が、計4つある。南北の両端には、空堀・土塁が存在し、特に南側の土塁は、空堀からの比高差7~8m を測る。調査の結果、第4郭で径70~80cm、深さ20cmを測るピット列を確認し



調 査 地 位 置 図 (1/50,000)

た。ピット列は、南北方向に 走るものが4列あり、掘立柱 建物、柵列を構成するものと 思われるが、今一つ整然とし ない。ピットに伴う遺物で確 実に時期のわかるものは出土 していないが、掘削中に採取 した遺物は、土師器、陶器、 輸入磁器片が多く、そのほと んどが中世・近世に属するも のである。

B地点は, 丘陵の平坦地にあり, 平坦地の南側には, 土

塁が認められるため、多保市城の支城が想定されていた。調査の結果、10基からなる中世の墳墓群を発見した。墳墓は、1~2mの円形あるいは方形に河原石を並べ、その下に火葬骨を埋納したもので、中には土師器鍋を蔵骨器に転用しさらにその下部に土師皿を埋納する例も見られた。土器は、鎌倉時代後期に属するものであり、特に土師器鍋を蔵骨器に転用する例は、福知山市遠くは神戸市にまでその類例が認められるものである。

C地点は、同じく丘陵をカットして作った平坦地にある。同地には「薬王寺」という小字名が残り、江戸時代の文献にも街道沿いに寺の存在した記事が見えること(C地点は、国道9号線=旧山陰道に近接する)から寺に関連する施設も期待された。調査の結果、この平坦地は、遺物から考えて近世以降に丘陵の切断・整地が行われたことを確認したものの、城・寺に関連する積極的な証拠は得られなかった。

D地点は、A地点の北東にあり、丘陵の先端の平坦な部分に位置する。調査地が広大で平坦地が3つ存することから、さらにD地点を3つに分けた。D-1地点は、丘陵をカットして平坦部を形成しており、その中心部と南側に土塁が認められた。調査の結果、弥生時代中期・後期に属する竪穴式住居跡(7棟)、奈良時代の掘立柱建物?、土拡等の遺構を検出した。D-2・3地点では、遺構は検出できなかったものの、多量の奈良時代に属する土器を採集した。

まとめ 今回の調査は、多保市城の城郭の構造を明らかにすることを主目的としたものであったが、多保市城に関連する施設・遺構としては、土塁・空堀・郭・ピット群(掘立柱建物?)を発見することができた。遺物は、量は多くないが、龍泉窯系の青磁椀片などの輸入磁器や施釉陶器・土師器がある。また新たに弥生時代、奈良時代、鎌倉時代の集落や墳墓などの遺構、それに伴う多量の遺物を検出・採取することができた。これらの遺物については整理の段階であるため、その成果・問題点に関して詳らかにできないが、整理作業が一段落した時点で報告することにしたい。 (山下 正)

26. 青 野 遺 跡 第 9 次

所在地 綾部市青野町吉美前

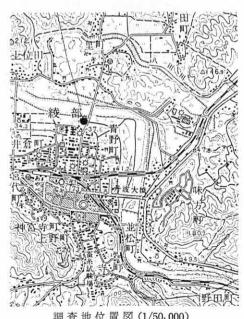
調査期間 昭和60年3月7日~3月30日

調査面積 約 150m²

はじめに 今回の調査は、白瀬橋橋梁改良工事に伴い実施したものである。周辺は、青 野遺跡として知られている地域で、過去の8次にわたる調査により、弥生時代・古墳時代 を中心とする集落遺跡であることが確認されている。

調査地の南側は、最初の発掘地となった青野A地点である。ここでは、弥牛時代から古 **墳時代の住居跡13基をはじめ、多数の溝や土広が検出されている。また、道路を隔てた東** 側でも古墳時代の住居跡7基が確認されている。これら近隣での調査成果からすると、今 回の調査地においても多数の遺構が存在するだろうことは容易に予想された。

調査概要 調査は、対象地内にトレンチを設定して行った。基本的な層位は、約30cm の耕作土の下に 40cm 程度の茶褐色土層があり、この下には黄褐色土層が続いていた。過 去の調査成果をもとに、茶褐色土層までを重機により排除した。これ以下は、人力による 精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。



調査地位置図(1/50,000)

精査の結果, 黄褐色土層の上面で, 竪穴式 住居跡1棟・溝4条・土拡13基・ピット多 数を検出した。竪穴式住居跡は、トレンチ 北西隅で検出したため、規模は不明である。 形状は隅丸方形を呈するものと思われる。 埋土上面から古墳時代前期の高杯が出土し ている。溝は、いずれも1~2mの幅で、ほ ば南北方向に走るものである。

まとめ 本年度の調査では、遺構を多数 検出したため, 各遺構の掘削は次年度の作 業とした。それぞれの遺構の時期や性格な ど,詳細についての報告は、次年度に送り たい。 (三好 博喜)

27. 奥 山 田 池 遺 跡

所 在 地 綴喜郡田辺町三山木奥山田

調查期間 昭和59年12月19日~昭和60年3月29日

調査面積 約 1,400m²

はじめに この調査は、日本道路公団が計画している京奈バイパス建設工事に伴う事前 調査として行ったもので、今年度が初年度にあたる。この遺跡は、昭和47・57年度に京都 府教育委員会の手により、バイパス建設予定路線内の分布調査が行われた際に確認された もので、奥山田池周辺において奈良時代に比定される須恵器・土師器・瓦片が採集された。 その他、バイパス予定路線内には奥山田池遺跡を含む18か所の遺跡分布が確認されている。

調査概要 調査地は、奥山田池西方に広がる平坦地・山林を含む路線長270m・道路幅25 mを対象地とした。伐採後、対象地北西端には尾根を2分する切り通し様のものがあり、その南側には、奥山田池に続く谷筋を埋めたてた広範囲にわたる平坦部が存在した。この平坦部・切り通し部分に5か所のトレンチを設定し掘削を行ったが、ここには旧軍隊の火薬工場が建っており、その後、牧場・果樹園として利用されていたようで、これらに伴う基礎・トタン板・鉄釘などが出土した。切り通し部分も同様で、火薬工場へ続く進入路ではないかと思われる。

山林部分では11か所のトレンチを設定した。対象地南東端近くのトレンチにおいて、須 恵器・土師器・瓦片を多数検出したため、窯跡が存在する可能性が出てきた。そのため対

象地を道路のり面までとし、新たに伐採を 行った。伐採後、西向きの斜面には、窯体 天井部が落ち込んでできたのではないかと 思われる凹みが各所に見られた。それぞれ に小トレンチをあけたが、調査地が砂礫に より構成されているため、大雨等によりで きた自然地形であることが明らかとなった。 窯体灰原もそれに伴って流出したのか、調 査ではみつからなかった。

出土した遺物は、瓦・須恵器・土師器片 であり、整理箱にして約15箱を数える。そ



第1図 調査地位置図(1/50,000)

京都府埋蔵文化財情報 第16号

れらの中には、軒平瓦3・塼1点もある。また、窯壁のはがれたものや、生焼け、変形した製品もあることや、遺跡地の立地条件からして、調査地内か調査地周辺に窯が存在していたことは確実と思われる。出土した軒平瓦(平城宮式6721系)と同系統のものは山城南部では、調査地より北方へ約3kmの所に存在した興戸廃寺(白鳳時代創建)や恭仁宮跡・上津遺跡などでも出土している。なお、出土した土器類は、奈良時代末期頃のものと考えられる。 (増田 孝彦)



第2図 調 査 地 全 景

資 料 紹 介

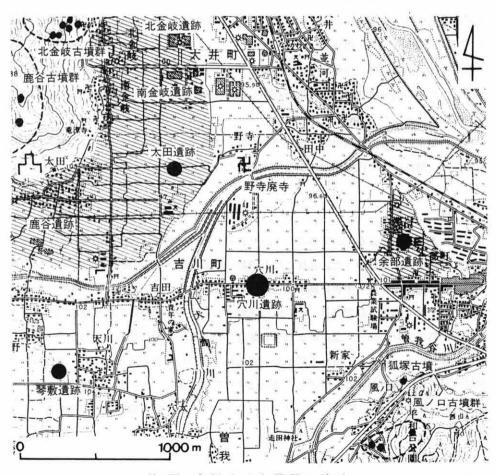
亀岡市穴川遺跡の表採遺物について

村尾政人•田代弘

1. はじめに

今回報告する資料は,亀岡市吉川町穴川地内において地表に露出していた遺物を採集し (注1) たものである。

採集遺物は、国道9号バイパス関係昭和57年度調査の穴川遺跡に包括しうる位置・内容 を持っていると思われるので、まず前回の調査経過、そして遺物発見の経過等を略述し、



第1図 穴川遺跡と周辺の遺跡

ついで遺物個々について具体的に記述していくこととしたい。

調査地点は曽我部町から大堰川に流れる犬飼川と曽我谷川の2条に挟まれたなだらかな標高約100mの微高地に位置し、余部町から本梅盆地へむかう旧山陰街道に沿う旧家が集中する所である。

前回の調査は、建設省の依頼を受けた当調査研究センターが、国道9号バイパス予定路線である曽我部町風ノ口から薭田野町を経て大井町北金岐までの約40,000㎡を対象とし、主に桑田郡条里跡の調査を目的として行ったものである。地区割は、道路建設予定地の中心部から75m四方の大地区をA~Gに設定し、小地区としては、75m四方を3m方眼に区画した。また、小地区は、南西隅を基準に南北をアルファベットで(A~Yの25)、東西を数字(道路予定路線中央が30ライン)で地区名をつけた。

トレンチは、幅約3 m・長さ20mを南北に設定したものと、現地表面の畦畔・水路・農道等を直角に断ち割る幅約2 m・長さ5~10mを設定し、人手により掘削を行った。その結果、溝状遺構・土拡・柱穴等を検出した。遺構は時代別に大きく分けると弥生時代後期と平安時代末の2時期がある。

弥生時代後期の遺構は方形の土城が2基あり、土城内からは壺、甕、砥石等が出土した。 平安時代の遺構は溝2条、柱穴等を検出した。遺構内からは、土師器片、須恵器片、瓦 器片などが出土した。

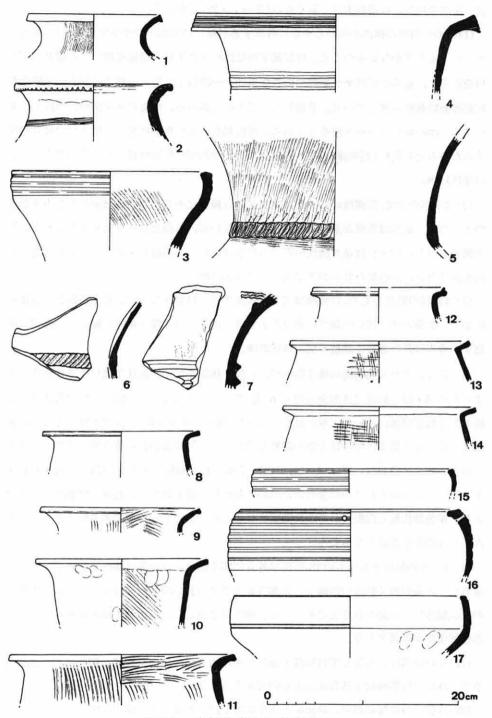
前回の調査では弥生時代中期の出土遺物が確認できていなかったため、今回の新たに発 見された資料は弥生時代中期の空白を埋る貴重な追加となった。

2. 遺物

遺物は表面採集によるものであるため、それぞれの伴出関係・出土層位等について明らかにすることはできなかった。表採された遺物の総数は約200点を数える。その内分けは、近〜現代の陶磁片 3 点・中世に属すると思われる土師器片 2 点と、その他不明細片数点を除いてはすべて弥生土器である。その他に遺物としては玢岩の磨り石状円礫 1 点とガラス質安山岩製スクレイパー1 点、計 2 点の石製品があった。本稿では表採遺物のうち弥生土器の主なものと、スクレイパーを図示し、観察結果について報告文としたい。遺存状態は良好でなく細片資料が多く、図示した遺物はすべて図上復元によった。弥生土器は、壺・甕・高杯・畿内第 N 様式凹線文盛行期のものを主体とし、中期前葉のもの、後期のものを若干含む。

壺形土器(1~7・18~19・22~25)

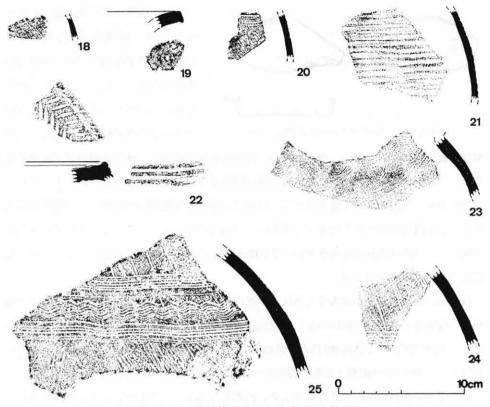
壺形土器には、頸部がゆるやかに外反して立ち上がり口縁部に至るもの $(1 \sim 2)$ と円筒



第2図 亀岡市穴川遺跡の表採遺物(1)

状の頸部を持ち、口縁が大きく開くもの(3~7・22)とがある。

- (1)はやや肉厚の体部からゆるやかに外反する口縁。口唇部がやや下方に肥厚し、端部にナデによるわずかな面をつくる。口唇部下端にはハケ状工具先端部を用いて右廻りの刻み目を巡らす。器表外面はナデ調整ののち頸胴間に一帯以上の櫛描直線文を施し、不安定な回転運動の軌跡を残している。手廻しによるものであろう。内面はナデ調整、口縁部に6~7本/cmの粗いョコハケ痕をとどめる。暗灰褐色の暗い色調を呈し、胎土には風化のすすんだ長石と石英粒(亜角礫)の混入が目立つ。中期初頭に位置づけられるものであろう。口径は14cm。
- (2)は小形の壺で,頸部はゆるやかに外反し、口縁部に至る。口唇部は面をなし上下端をつまみ出す。調整は器壁が荒れており明らかでないが、外面にはヘラ磨きがみられる。淡灰褐色を呈し、胎土には亜角礫状の石英のほか頁岩ないし粘板岩・ホルンフェルス等の円礫を多く含み、赤色酸化粒が顕著である。口径16.5cm。
- (3)は筒状の頸部をもち、口縁部は大きく外反する。口唇部は下端に粘土を貼付し端面を拡張し、3条の狭く浅い凹線文の施文帯とする。頸部には2条+α本の幅の広い凹線文を施す。器表は荒れ著しく調整不明。口径21cm。
- (5~7)はいずれも頸胴間の破片資料で、口縁・体部を欠く。櫛状工具による圧痕帯を有するもの(5・6)と断面三角形突帯 $(2+\alpha)$ 条)を有するもの(7)とがある。(5)は器表外面を幅のある板状原体によって丁寧に調整。(7)は口縁内面を施文帯とし、円形浮文1以上、波状文一帯以上を施す。突帯は上端の調整を主に行い下端は補助的、焼き締りの良好な土器である。胎土・色調は、(3)・(4)・(6)については、(4)と同様であるが、(7)は石英・長石・チャートが亜円礫をわずかに含むほかは顕著な砂粒の混入はなく、色調も暗褐色系を示す。また、赤色酸化粒も肉眼でわずかに観察されるのみであって、特徴のある胎土をなす。搬入品の可能性を指摘しておこう。
- (4)は丈高の器体をもつもので、頸部は外方に開く筒状、口縁部は曲折して直立する。口縁外面に3条の浅く幅広い凹線文、頸部外面に2条の狭い凹線文を施す。内外面とも幅広の板状原体による調整痕をとどめている。明灰褐色を呈し、径1mm未満の砂粒を多く混入、赤色酸化粒が顕著である。
- (19)は口縁部片。外反して口唇部下端につまみ出しつつ端面を形成。細片のため器形は 不明。外面に竹管棒状工具先端による刺突がみられる。
- (22)は広口壺口縁端部片。端面を上下に拡張し、2+α条の狭く深い凹線文を施す。口唇部上端には刻みを施し、内面を施文帯としてハケ(板状工具)原体による羽状文を廻らす。
 - (18)・(23)~(25)は体部破片である。(23)は最大腹径を体部中央にもつ壺形土器。残存

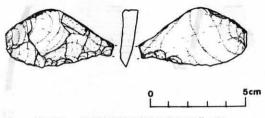


第3図 亀岡市穴川遺跡の表採遺物(2)

部分は肩部~腹部にあたり、外面をナデ調整後、波状文+直線文+波状文の複帯構成の櫛描きによる施文をもつ。施文は先端の不揃いな原体を用い、不規則な回転運動を利用して軽く浅く行われる。断面において外傾する接合痕が観察された。明灰褐色を呈し、砂粒の混入は少なく胎土は密である。金ウンモの混入が目立つ。(24)・(25)は大形の壺形土器体部破片である。両者は後述するように胎土・文様構成を等しくしており、同一個体資料である可能性がある。(25)はタタキによる成形後、ハケ・ナデ調整を行う。その後、平行な2本の細線を一対とした斜格子文を施し、櫛描による直線文+波状文+直線文を複帯構成で描く。櫛描文は先端の揃った原体を用い、安定した回転運動を利用したらしく、整然としており、前者(23)とは対照的である。内面には、ハケのちナデ。明灰褐色を呈し、やや砂質の胎土を用いる。亜円礫の堆積岩の混入が目立つ。

甕形土器 (8~14・20・21)

甕形土器は、胴部の張りが弱く口縁がゆるやかに外反し、口縁にわずかに端面をつくるもの(8~11)、口縁がくの字状に外反し体部の張るもの(12~14)、の2つの傾向にわけることができ、(8)は口縁端部をナデ、小さいが明瞭な端面をもつ。外面は頸部以下縦位暗灰色



第4図 亀岡市穴川遺跡の表採遺物(3)

を呈し、微細な石英粒の混入がめだつ。口縁内面を外面と同じ原体を用い横位のハケを施す。(9)は体部に張りをほとんどもたない。ゆるやかに外反する口縁部。端面をナデ、面をつくるが下端の稜は明瞭でない。調

整は繊維束状の工具を用い、外面を縦位、内面は口縁部を横位、体部を斜位に丁寧に行う。 そののちにナデを施すため、調整痕は明瞭には残さない。暗灰色を呈し、長石・石英粒の ほか堆積岩の亜円礫が多く混入される。(10)は口縁の外反度が比較的強く、頸胴間の区別 があるが、内面にほとんど稜をつくらない。口唇部は強いナデによって小さいが明瞭な端 面をなす。調整は内外面ともナデ、径2mmをこえる長石・石英粒の混入があり、やや粗。 灰色系の暗い色調を呈する。

- (11)は口縁がゆるやかに大きく外反し、端面下端をわずかにつまみ出すようにしておさめる。体部外面を縦位の粗いハケ、口縁内面を横位のハケによって調整、体部内面をナデによって仕上げる。全体に(9)に近い特徴をもつ。径1mm内外の堆積岩等の混入が多く、粗である。(8~10)は調整・形態的特徴から、中期初頭に位置づけられよう。
- (12)はくの字状に外反する頸部をもち、端部を上方につまみ上げ、端面に強いナデによって凹線状の痕跡を残す。外面タタキのちナデ、内面はわずかにハケ調整痕を残す。
- (13)・(14)は頸部がくの字状に外反、口縁端面に小さな面をつくる。いずれも外面をタタキのちハケ、内面を丁寧にナデ。(21)は体部片である。外面には幅広く、整然としたタタキ整形痕がみられる。のちに内外面にやや斜位のタテハケ(20)は、5 条+ α の櫛描直線文と同じ施文具によって烈点文が施される。内面ナデ。(12)~(14)は(20),(21)前者に比して色調が明るく、混入される砂粒の粒径も1 mm 以下と小さく胎土が密である。近江系甕の頸胴間に通有にみられるもので、後期に属するものであろう。

鉢型土器(15·16)

なだらかなカーブを描いてたちあがる鉢形土器。(15)は内傾する幅の狭い端面をなし、口縁下に3条+αの凹線文をもつ。(16)は口縁端部をつまみ出し、内側に拡張、内傾するやや幅広の端面を形成する。口縁外面に幅広く浅い凹線文7条を施す。紐孔とみられる孔が一孔残存。両者とも破片であるため全形を知り得ていない。台付鉢の可能性を残す。明灰白色を呈し、極細粒砂を顕著に含む。長石・石英等の鉱物のほか堆積岩の亜円礫を主体として混入する。赤色酸化粒がめだつ。

高杯形土器(17)

直口の杯部をもち、腰にやや稜をつくる。屈曲部に棒状工具状の先端の整わない工具により一条の凹線文、口縁外面に浅く軽い凹線文一条を施す。器表外面ナデ、内面丁寧なナデののち部分的にヘラミガキ。頁岩ないし堆積岩。ホルンフェルス等の堆積岩の混入を多くみる。

不定形刃器(第4図3)

縦長剝片を素材とする。A面側は剝片剝取段階・調整段階の小剝離痕が侵入するが、B面には大きく主要剝離面を残す。片刃である。不定形刃器として考えたが、A面右端には、断面が不整円形の折損面があり、調整剝離が内面より為されることから、ドリルの可能性があることを付記しておく。

上縁には、自然礫面を留め、流状構造が観取される。礫積は亜角砂、礫面の風化度は強く、磨耗がみられることから、産出地周辺の転礫を搬入したものであろう。断口は漆黒色を呈し、長さ5.8cm・幅2.9cm、重量は約20gを測る。

3. まとめ

以上、採集遺物について個々に観察結果を記した。土器片は表面採集であるため器壁が 荒れ調整・整形手法が判別しにくいものが多い。しかし、折損面にみる磨滅は顕著ではな く、土砂の流出堆積による転入などの二次的要因は考え難い。当該土器及び石器資料はも とより表採地付近に埋没していたものであり、遺物の廃棄時の地点を大きくは遊離してい ないと考えてよいであろう。

穴川遺跡は桑田郡条里跡の遺構確認調査の際,下層において発見された遺跡である。発掘調査では弥生時代後期の小土拡と弥生時代後期~平安時代の土器片を少量含む包含層を検出したにすぎなかった。そのため報告文においては,当地点の弥生時代に関する遺構は後期段階に初めて成立をみ,短期間に終焉をみる小規模な集落遺跡であると考えた。しかし,今回表採した資料の中には,中期前半に属すると考えられる粗いハケメを内面横方向・外面縦方向に施した甕や壺片が含まれている点から当遺跡の形成が少なくとも中期に開始され,断続的ながらも後期に及ぶことが明らかとなった。

亀岡盆地では、現在弥生時代の遺跡は26か所以上が確認されており、代表的なものとしては弥生時代前・中期の太田遺跡を始め、南金岐遺跡、北金岐遺跡、千代川遺跡(第3次)、御上人林廃寺跡(第3次)、史跡丹波国分寺跡(第2次)や中期の千代川・桑寺遺跡、余部遺跡、後期の南金岐遺跡、北金岐遺跡などがある。弥生時代前・中期の太田遺跡、千代川・桑寺遺跡、余部遺跡以外の遺跡は包含層から小片の出土がみられるだけであるが、これらの遺跡は、ほぼ標高100m前後の段丘上に位置している事に共通点がある。当遺跡も犬飼

川・山内川を挟んだ対岸の自然堤防上に立地しており、太田遺跡との関連が考えられる。 また、中期後半の遺物もあり、当遺跡に最も近接している同時期の余部遺跡との関係が予想される。関連性については、将来の課題であるが、拠点集落である太田遺跡と余部遺跡との間に位置することなどから、当地方の弥生時代を考える上で新たな資料を提供したと言える。

なお、本稿は、1. はじめにを村尾が、2. 遺物を田代が、3. まとめを村尾・田代がそれぞれ分担執筆した。

(村尾政人・田代 弘=当センター調査課調査員)

- 注1 出土遺物は、亀岡市吉川町穴川におられた浅野武男氏の表採によるものも一部あり、調査 等にも大変御協力頂いた。
- 注2 村尾政人・田代 弘「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡 調査概報』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注3 石井清司・田代 弘・森下 衛「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」 (『京都府遺跡調査概報』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注4 岡崎研一「千代川遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京都府 埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注 5 樋口隆久「御上人林廃寺第 3 次発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告』第 6 集 亀岡市 教育委員会) 1978
- 注 6 樋口隆久「史跡丹波国分寺跡第 2 次発掘調査」(『亀岡市文化財調査報告』第13集 亀岡市 教育委員会) 1984

府下遺跡紹介

28. 正 道 官 衙 遺 跡

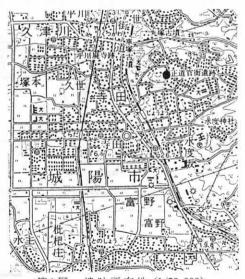
正道官衙遺跡は、城陽市寺田正道にあって、国の史跡に指定されている。ここは、古墳 時代から歴史時代にかけての複合遺跡であるが、本紹介でとりあげるのは遺跡の東半部で みつかった大規模な建物跡群である。

この遺跡がどのような性格であるかについては、官衙説・寺院説などがあり対立していた。寺院説については、近年の発掘調査によって正殿・後殿ともいうべき大型の掘立柱建物跡を検出したこと(第2図)、この建物の西側で倉庫群と考えられる建物跡群がみつかったことなどから、影が薄くなりつつある。むしろ、建物跡群の整然性から官衙、中でも郡衙(郡の役所)と考えられるようになってきた。

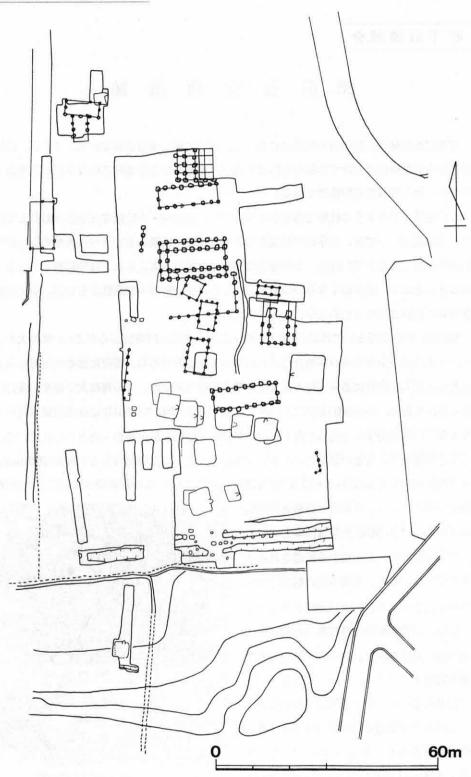
郡衙は、郡の役所として郡司(大領・少領・主政・主帳の四等官からなるが、郡の大きさにより人員の多少はある。)が地方行政にあたったところである。郡司にはその地方の有力豪族が就任し、古代にあっては人民支配の基本単位であった。この郡は大宝律令の施行により登場したが、その前身は評(こほり)である。評は、大化 5 (650)年頃から朝鮮半島のコフルなどの制度をまねて造られたもので、当初は軍事的色彩が強かったといわれている。『常陸国風土記』などの記載によれば、中央から派遣された総領のもとで国造(地方豪族)の支配領域を分割したり、そのままで評に移行させている。この評の役人を評造とか評督・

助督と呼んでいる。この後、総領と評の間に「国」ができ、国司(当時は国宰といったのかもしれない)が中央から派遣されるようになった。また、天智~天武朝を通じて、評の下に1里=50戸の編戸が行われるようになり、持統朝の飛鳥浄御原令の施行と庚寅年籍の実施を経て、国一評一里の地方体制が完成するに至る。この評が大宝令で郡と改名して、国一郡一里制になるのである。このような経過で郡ができたため、郡単

位で調庸を集めたり(むろん,国衙でもする),贄の貢上の単位になったりしている。



第1図 遺跡所在地 (1/50,000)



第2図 主要遺構配置図 (『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11集より、再トレースした。)

また、田租も各国・各郡の正倉(クラ)に不動穀・動穀に分けて保管もしている。

郡衙の構造は、長元元(1028)年の『上野国交替実録帳』によってある程度判明する。この記録によれば、郡衙建物は郡庁(郡衙の中心的建造物)3~6字、館(郡司の宿舎)16字、厨屋(郡衙の公的な食事の準備と食料品や食品類の倉庫を備えた建物群)4字、正倉13字と、平均的に求めることができる。中には館の中に厩屋をもつものがあり、伝馬が置かれたのではないかと推定されている。また、厨屋については公的な食事のために独立した建物であるものと、郡庁や館に附属するものの二種類ある。後者は主に郡司の日常の食事に使用されたと考えられる。

郡衙はこれらの建物が1区画をなして存在したようで、門が設けられたようである。国 府域の場合方八町で中心官衙は方二町であることが明らかになっている。先の上野国の郡 衙の平均建物数が40字であることから、1区画が方二町の大きさと推測されている。

郡衙の発掘調査は近年進み、この正道官衙遺跡もその1つである。全国の出土例をもとに一般的な特色を述べると、(1)郡衙は7世紀末に始まり10世紀末頃まで存続する、(2)建物は掘立柱による建築である、(3)首長層の居宅を拡充せず、新設されている、といった点をあげることができる。このうち(1)は評価・郡衙の成立時期を示し、文献史料により明らかになっている時期と一致している。10世紀末で絶えるのは、郡衙が消滅するのではなく、どこかへ移転したからかもしれない。

正道官衙遺跡の東群からは正殿・後殿ふうの掘立柱建物跡が検出されたが、建物配置が整然とし、かつ建物の規模が大きいこと、主要街道に直接南面した可能性があること、などから山背国久世郡郡衙である可能性が高い。もし郡衙とすれば、これが郡庁になると思われる。ところで、遺跡の西群では大型の倉庫を含む掘立柱建物群がみつかっている。この西群の遺構は東群に並行するものと先行するものがあり、単純には解釈できない。しかし、東群に先行する時期の建物跡もみつかっており、郡衙に先行する施設として注目される。倉庫風の建物は、あるいは正倉に相当するのかもしれない。 (土橋 誠)

<参考文献>

吉田 晶「評制の成立過程」(同『日本古代国家成立史論』所収 東京大学出版会) 1973

山中敏史「古代郡衙遺跡の再検討」(『日本史研究』161) 1976

山中敏史「国府・郡衙跡調査研究の歴史」(『仏教芸術』124) 1979

山中敏史「評・郡衙の成立とその意義」(『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化 財論叢』同朋舎) 1983

山中敏史「遺跡からみた郡衙の構造」(狩野 久編『日本古代の都城と国家』塙書房) 1984

山中敏史「都城と地方官衙 Ⅱ 国衙・郡衙の構造と変遷」(『講座日本歴史』2・古代2 東京大

学出版会) 1984

前沢和之「『上野国交替実録帳』郡衙項についての覚え書」(『群馬県史研究』7)1978

丸茂武重「国府・郡家の建物」(『国学院雑誌』62-9) 1961

山田良三「山城久世正道廃寺出土の瓦」(『古代学研究』52) 1968

藤沢一夫「山城久世正道遺跡と郡衙の性格」(『大阪府文化財調査概要 (1971)』) 1971

高橋美久二「正道遺跡の調査」(『日本歴史』306) 1973

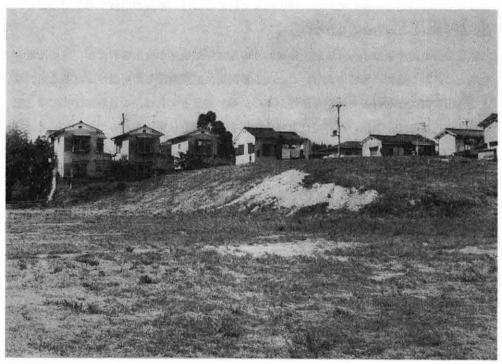
伊賀高弘「山城国久世郡に於けるミヤケ設定の可能性について一正道遺跡の若干の検討を中心として一」(『奈良古代史論集』第一集) 1985

高橋美久二「正道廃寺発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1970 近藤義行・奥村清一郎「正道遺跡第6次発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第6集 城陽市教育委員会) 1977

近藤義行·梶本敏三「正道遺跡第10次発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第9集 城陽市教育委員会) 1980

近藤義行「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11集 城陽市教育委員会)1982

近藤義行「正道遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第13集 城陽市教育委員会) 1984



正道官衙遺跡近影

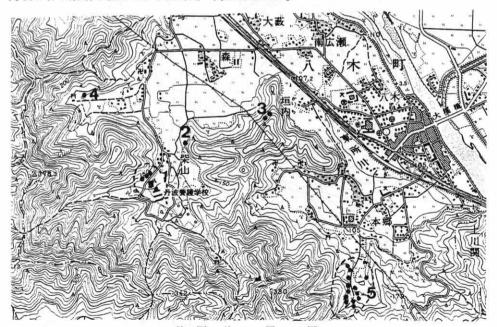
29. 坊 田 古 墳 群

はじめに

坊田古墳群は、京都府船井郡八木町大字柴山小字坊田にある。方墳1基、円墳4基からなる後期古墳群で、いずれも内部主体として横穴式石室を採用している。

古墳群は、東を標高212mの丘陵、南と西を標高350m程の山塊に限られた小さな谷の入口を占め、南面する斜面に築かれている。周囲には、芝山古墳1基を除くと群集墳等同時期の石室墳は知られておらず、5基のみが孤立して存在している感がある。現状は檜林に覆われており、静寂な環境の中にある。このうち5号墳は、養護学校建設の際に発掘調査の対象になったが、校舎の配置変更など行政当局の配慮によって現在も校庭の一隅に保存されており、学校教育の場で活用され続けている。

この古墳群を訪れるには、国鉄山陰線を利用して八木駅で下車、駅前から私バスに乗り継ぐとよい。駅から徒歩で行く人は、駅の裏手に出て本郷を抜け、古谷古墳群をあわせて見学するとよいだろう。同一地域内の二つの古墳群の在り方を比較しながら理解することができる。あとは、地図をたよりに山裾をつたって、畦畔に植えられているハンの木や口丹波の谷の景観を眺めながら目的地へ向かえばよい。

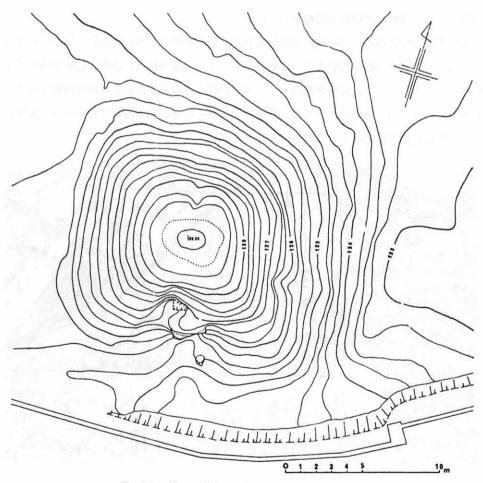


1. 坊田古墳群 2. 柴山古墳 3. 森古墳 4. 神田古墳 5. 小谷古墳群

古墳群の概要

坊田古墳群は、群を構成する各々の古墳が一定の距離を置いて築かれていて、それぞれが単独墳の様相を備えている点に特徴がある。これらは、立地・墳丘の状態などから大きく二つのグループに分かれることが指摘されている。参考文献によりながら、見学時の私見を合わせ、簡単に概要を記しておこう。

第1のグループは、緩斜面に立地し谷川を挟んでむかいあう1号墳と5号墳である。中心で35m、墳丘裾で15mの距離にあり、隣接する関係にある。1号墳は、一辺が約18m、高さ約4mを測り、南南東に開口する横穴式石室を内部主体とする。墳丘面積に対して高さが意識されているようで、実際の規模より大きくみえる。幅の広い尾根稜上に占地し、尾根の基部側には、墳丘形成時の盛土の確保と裾部成形の痕跡と見られる削平面が広い範



第2図 坊田1号墳墳丘実測図(文献1より転載)

囲にわたって観察することができる。石室は,羨道部の天井が崩落していて中にはいることはできないが,墳頂に登ると崩れた石材間からわずかに石室内部を覗くことができ,使用石材の規模の一端を把握できる。過去の調査によると,玄室長4.8m,幅2.3m,高さ2m,羨道長2m,幅1.3m,高さ0.65mの規模を持つ両袖式石室であることが明らかにされている。

5号墳は円墳である。1978年に発掘調査が実施され、墳丘と内部構造の一部について明らかにされた。墳丘は大半を盛土で築き、裾部に積み石を持つ円墳である。直径は16mを測る。裾に接して浅い周溝状の溝があり、外堤と推定される列石も確認されている。この部分を占めると径20mの規模となる。

石室は、南東方向に開口する両袖式で、巨石を用いて構築してある。石室の規模は全長10.1mと巨大なものであり、玄室長3.8m、幅は奥壁で2.15m、高さは最高部2.4mを測る。 羨道は6.3mと長く、幅も玄門で1.4m、羨門で1.8mと広い。高さは、最も高い部分で1.9 mであった。玄室の四隅から、多数の遺物が比較的まとまった状態で検出されており、須 恵器杯身・蓋・提瓶・高杯・聴・台付長頸壺・平瓶などのほか鏃・刀子・石突・轡・鉸具 などの鉄製品があった。中世には再利用があったものとみられ、瓦器・土師器などの出土 も報ぜられている。

第2のグループは、1号墳の西方約50mの丘陵端に位置する2・3・4号墳である。これらは山塊から派生する小支丘の末端を占め、丘尾を切断して墳丘を形成するタイプであり、1号墳にみる立地とは対照的である。ほぼ等間隔に並んで築かれ、墳形はいずれも楕円状を呈する円墳である。

2号墳は、直径8m、高さ2m。天井石が露出しており、わずかに内部を窺うことができる。主体部は、南東方向に開口する横穴式石室である。

3号墳は、直径15m、高さが4mで東に開口する右片袖の横穴式石室を持つ。石室は現在も開口していて中に入ることができる。チャート・ホルンフェルスなど近在で入手できる堆積岩やその変成岩を利用しているようである。奥壁は一石を立てて鏡石とし、天井は巨大な石3個を架構してある。羨道は、玄室長とほぼ同じ長さだけ残存していて、羨門はバチ状に広がる傾向がみられる。現存規模は、玄室長3.8m、幅1.7m、高さ1.85m、羨道長3.5m、幅1.05m、高さ1.10mを測る。

4号墳は、大きく破壊をうけている。石室は奥壁と左側壁の一部が残存するのみで、天井石も失われている。直径10m、高さ2mの墳丘規模が推定されており、石室の現存規模は長さ3.6m、幅1.2m、高さ1.5mを測る。羨道部は埋没していて、袖の状態は明らかでない。小形の石材を用いて丁寧に石室を構築しており3号墳と若干様子を異にしている。

年代と性格

当古墳群において築造年代が明らかにできるものは5号墳のみである。調査担当者は、この築造年代について「その立地、規模、構造、出土遺物を総合し、7世紀前半を中心とする時期に求めることが適当である」とされている。また、1号墳については出土遺物が判明していないためなお明らかではないとしながらも、「5号墳に先行して築かれた可能性は高く、なおあまり隔たる時期に築造されたものでもないと推定される。したがって、1号墳築造の年代を6世紀末ないし、7世紀初頭と推定したい」とされている。さらに古墳群の性格について「坊田古墳群は、7世紀前半を中心とした5基から成る古墳群であるが、古墳時代後期末葉の十数基ないし数十基から成るいわゆる群集墳築造の前段階に位置する古墳群」との意見を述べておられる。

5号墳については概要報告であり、遺物の細部については十分検証することはできないが、出土状況写真から判断するところによると、築造年代は報告者が説くよりもさらに遡る可能性がある。ここでは図版第92(2)、図版第93(1)、(2)に示された遺物のうち、年代を比較的とらえやすい須恵器杯身・蓋・高杯について検討してみよう。

高杯は、いわゆる長脚二段である。杯部は、口縁部が直立ぎみに外反する比較的底の深い椀形をしていて、外面に凹線を伴うものがある。体部には、二段にわたって長方形のスカシ窓を刻んでいるが、簡略化されてヘラによる切り込みだけのものもある。杯は小形化傾向にあり、かえりの逆転する以前の資料が主体を占めるようである。杯身の立ちあがりは短く、底部の成形手法も簡略であるものが多い。蓋も同様の傾向があり、平瓶・提瓶は環状や鍵状の把手をもたないなど新しい様相が窺われる。これらの特徴は、陶邑編年の2型式5段階・田辺昭三氏のTK 209型式におよそ併行するものであり、したがって6世紀末葉~7世紀初頭頃の年代的位置を与えるのが妥当ということになる。

この時期は、最近調査が実施された亀岡市所在の小金岐古墳群を例にとると、小規模な群集墳のなかに、小金岐1・17・71号墳など卓越した内容を持つ少数の独立的傾向を備える古墳が出現してくる時期にあたる。ここでは、大型の石室・墳丘を持つ少数の古墳が各支群の築造契機になるという可視的なありかたとは正反対に、先行する小古墳を否定する形がみられる。これまでの調査例は10基に満たないため、早急に結論を導くことはできないが、この段階に等質的な群形成の流れに大きな画期があったと考えることができる。小金岐古墳群は、この後、わずかに古墳の築造を継続し、無袖式の小石室が築造されるに及んで終焉を迎えることが明らかにされている。

このように見ると, 坊田古墳群は小金岐古墳群で画期をむかえる時期に歩調をあわせる

ようにして出現し、短期間のうちに群の形成を終える古墳群であることがわかる。小金岐 例では卓越するとは言え群中に埋もれる傾向にあるが、本例では古墳群中に先行・後出す る支群を含んでおらず、より自立的なあり方を示していると言える。これは、他集団と一 定度隔絶した内容をもつ造墓集団の出現を物語るものと把えることができ、その累世的な 墓所と考えることができるだろう。

大堰川流域の口丹波地方では、全長10mを超える横穴式石室をもつ古墳は坊田 5 号墳・ 犬飼1 号墳・法貴峠9 号墳の3 基が知られるにすぎない。また、横穴式石室を内部主体と する方墳は例がなく、1 号墳が唯一の例となっている。このように、坊田古墳群は極めて 特徴的な2 基の古墳を群中に含んでおり、当地域の古墳時代後期における「首長」の系譜 を引く集団の奥津城である可能性が高い。口丹波地域の後期古墳群を語るうえで最も注目 すべき遺跡であると言える。 (田代 弘)

<参考文献>

- 1. 堤圭三郎「坊田 5 号墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979-3)』京都府教育委員会) 1979
- 2. 堤圭三郎ほか「昭和51年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1977
- 3. 奥村清一郎「丹波」(『歴史公論』第九巻第三号) 1983.3

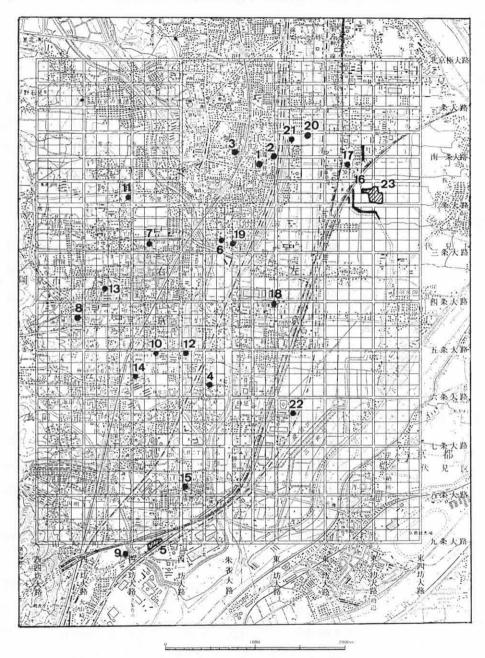
長岡京跡調査だより

年度も改まり、早や3か月。雨の続く梅雨の季節となりました。梅雨の季節ではありますが、現場は多く、各調査担当者と雨との戦いの日が続いています。この4月から6月にかけて行われた調査は、下表のとおり長岡宮跡3件・長岡京跡右京域12件・同左京域8件の計23件あります。そのなかでも、弥生時代中期の方形周溝墓群を検出した右京第187次調査や古墳時代前~中期の竪穴式住居跡を検出した右京第192次調査、長岡京の東一坊大路

	調査次数	地区名	調 査 地	調査機関	調査期間
1	宮内第155次	7AN9M	向日市鶏冠井町東井戸51-1	向日市教委	60. 5. 8~ 5.18
2	宮内第156次	7AN4D	47-1 向日市鶏冠井町御屋敷48-1 50-1	"	5.20~ 6. 7
3	宮内第157次	7AN9N	向日市鶏冠井町大極殿	"	6. 4~ 6.10
4	右京第187次	7ANMTT	長岡京市神足2丁目1-1	(財)長岡京市埋	3.29∼ 6. 1
5	右京第188次	7ANSKT	大山崎町円明寺門田 他	大山崎町教委	3.30∼
6	右京第189次	7ANSZG-3	向日市上植野町地後	向日市教委	4. 8~ 4.25
7	右京第190次	7ANIFD-4	長岡京市野添2丁目115-1	(財)長岡京市埋	4.16∼ 5. 2
8	右京第191次	7ANPHI-2	長岡京市天神3丁目115-1	"	5· 11~ 6· 19
9	右京第192次	7ANSSN	大山崎町円明寺算用田	大山崎町教委	4.23∼ 6.8
10	右京第194次	7ANKNT-2	長岡京市開田 3 丁目	(財)京都府埋	6-19~
11	右京第195次	7ANITT-11	長岡京市今里4丁目32•33-1	(財)長岡京市埋	5· 27~ 6· 28
12	右京第196次	7ANKSM-4	長岡京市開田2丁目10-47	"	5.28~ 6.10
13	右京第197次	7ANIMK-2	長岡京市天神 5 丁目230-7他	"	6. 4
14	右京第198次	7ANKTD-2	長岡京市開田 4 丁目120-1	//	6. 8∼
15	右京第199次	7ANTSN	大山崎町下植野境野	大山崎町教委	6.19~
16	左京第123次	7ANWSD	京都市南区久世東土川 伏見区久我西出町	(財)京都市埋	1.17~ 4. 2
17	左京第124次	7ANENR	向日市鶏冠井町西金村 5	(財)京都府埋	5. 8~
18	左京第125次	7ANLKC	長岡京市馬場北石ケ町	(財)長岡京市埋	5.13~
19	左京第126次	7ANFYT	向日市上植野町藪ノ下11	向日市教委	5. 13~ 5. 17
20	左京第130次	7ANEJS-5	向日市鶏冠井町十相11-1他	"	6. 6∼
21	左京第131次	7ANEIB	向日市鶏冠井町一ノ坪	"	6-20∼
22	左京第132次	7ANMTB	長岡京市神足暮角1の1	(財)長岡京市埋	6. 6∼
23	左京第133次	7ANWAN	京都市伏見区久我西出町	(財)京都市埋	4. 8~ 4.30 6.17~

長岡京跡調査地一覧表

長岡京条坊復原図



数字は本文()内と対応

西側溝と四条大路南側溝を検出した左京第125次調査等があり,多くの成果が上っています。 それでは以下に、4月24日、5月22日、6月23日の長岡京連絡協議会で報告された調査 のうち、主だったものについて簡単に述べます。

宮内第155次 (1) 向日市教育委員会

長岡宮の内裏内郭南面回廊の推定地であるが、残念ながら長岡 宮の遺構は認められず、長岡宮の整地土層を確認したのみである。 しかし下層からは、弥生・古墳時代の土城を検出し、弥生土器や 須恵器、土師器等の他、石包丁や古墳時代後期の埴輪片を得た。 また, 難波宮式の軒平瓦も出土している。

宮内第157次 (3)

向日市教育委員会

長岡宮の朝堂院北面回廊推定地の一角で、長岡宮の遺構は、整 地土層を確認したのみであるが、下層から古墳周濠の一部を検出 した。調査地が狭小であるため、墳形は不明であるが、周濠幅は 約5mを測る。周濠内からは、円筒埴輪の他、盾形埴輪等が出土 し、時期は、古墳時代中期後半のものである。この地一帯では、 他にも長岡宮の整地土層の下から古墳の周濠が検出されており, 古墳群の存在が判明している。

右京第187次 (4)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

勝竜寺城外郭北辺に位置し、勝竜寺城の外堀に当たる幅約 4 m 弱の東西方向の空堀を検出した。この他、室町時代末期から江戸 時代初期の掘立柱建物跡や長岡京期の掘立柱建物跡、土城、弥生 時代の方形周溝墓、土城墓、竪穴式住居跡等を検出している。

長岡京期の掘立柱建物跡は、2棟検出し、1棟は柱間約1.8 m を測る2間×2間の総柱の建物である。

方形周溝墓及び土城墓は、弥生時代中期のもので、方形周溝墓 は11基,土 広墓は6基検出している。また竪穴式住居跡は、幅約 7.6 m を測る円形の住居で、中央に炉を持つ。時期は、弥生時代 中期のものであるが、方形周溝墓によって削られている。

右京第188次 (5)

大山崎町教育委員会

長岡京の南縁部に当り、近接の調査地では、古墳時代中期~後 期の竪穴式住居跡を確認している。現在,中世の素掘り溝の他,

掘立柱建物跡や土城、轍等を検出した。建物跡の柱穴や土城から は, 瓦器椀が出土している。この調査地は, 平安時代に平坦化さ れた模様で、轍は平安時代のものである。また遺物は、古墳時代 の須恵器・土師器も出土している。

右京第191次 (8)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

掘立柱建物跡 2 棟以上と、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出 した。竪穴式住居跡は、西壁中央寄りにカマドを有している。

右京第192次 (9) 大山崎町教育委員会

調査地は、長岡京跡南縁部に当り、現小泉川の近接地である。 古墳時代の竪穴式住居跡を5基検出した。そのうちの1棟は、1 辺約5m前後を測る方形の住居で、北壁中央寄りにカマドを持つ。 また、東壁にカマドを持ち、中央部に炉跡かと思われる焼土を有 する住居跡もある。遺物は、古墳時代の土師器・須恵器の他、管 玉・石皿・磨り石等が出土した。なかでも庄内~布留式の土師器 が大量に出土した。

右京第194次 (10) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

府道開田・神足線歩道設置工事に伴うもので, 近在の調査地で は, 五条大路の側溝や長岡京期の掘立柱建物跡, 塚本古墳周濠等 が検出されている。現在長岡京期と思われる建物跡の柱穴が検出 されている。

右京第 195 次 (11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京期から平安時代の掘立柱建物跡1棟、柵列1、旧河道の 一部,土拡等を検出した。この他,古墳時代の竪穴式住居跡1棟, 土広、溝等がある。遺物は、須恵器・土師器・弥生土器・フレー ク等が出土している。

右京第196次 (12)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

1辺約3m弱を測る方形の掘形をした長岡京期の井戸や、幅約 1 m前後の平安時代の南北溝を検出した。また、中世のピットも 多数検出している。

左京第 123 次 (13)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

西羽束師川の河川改修工事に伴う調査で,長岡京の三条第1小 路南側溝や,東三坊大路西側溝,二条第2小路南北両側溝,長岡

京期の掘立柱建物跡、古墳時代の溝、弥生時代の溝、小柱穴、縄 文時代の土城、流路等を検出した。このうち、二条第2小路の南 北両側溝は、溝心々間で約9mを測り、北側溝が道路の推定中軸 線近くに位置する。遺物は、須恵器・土師器・黒色土器・瓦・ 緑釉陶器・灰釉陶器・弥生土器・縄文土器が出土している。縄文 土器は、晩期の滋賀里式である。

また京都市では、この調査や後述の左京第133次調査の他、試掘 調査が3件程行われており、二条大路南北両側溝や、四条第2小 路北側溝、東三坊大路東側溝等が検出されている。

左京第124次 (17)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

現在、中世の素掘り溝や長岡京期の南北方向に走る溝、土城、 ピットを検出している。南北方向の溝は、東三坊坊間小路西側溝 の可能性がある。この他、竪穴式住居跡等を検出しており、弥生 土器が含まれている。

左京第125次 (18)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、四条大路と東一坊大路の交差点推定地で、四条大路 南側溝及び東一坊大路西側溝を検出した。溝幅は、いずれも約 1.5m前後を測る。

左京第130次 (20)

向日市教育委員会

昨年度,当調査研究センターが行った左京第118次調査地の南接地で,左京第118次調査で一部検出した南一条条間大路南側溝推定地に当る。

左京第132次 (22)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

弥生時代の土拡を2基検出した。その他は、ピットが若干存在 する。

左京第 133 次 (23)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

4月に試掘調査を行い、東三坊大路東西両側溝や二条第2小路 北側溝等を検出した。6月17日から、試掘結果に基づき本格的に 掘り広げ、現在掘立柱建物跡の柱穴をいくつか検出している。

(山口 博)

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 組織および職員一覧 (60.6.30現在)

****	makes.	
理	建	-
Party.	377	1

福山敏男(京都府文化財保護審議会委員)

副理事長

樋 口 隆 康(京都府文化財保護審議会委員) 京都大学名誉教授

理 事

荒木昭太郎(常務理事·事務局長)

岸 俊男 (奈良県立橿原考古学研究所長) 京都大学名誉教授

藤 井 学(京都府立大学文学部教授)

川上 貢 (京都府文化財保護審議会委員)

足利健亮(京都大学教養学部助教授)

中沢圭二 (京都府文化財保護審議会委員)

佐原 真 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長)

原口正三(大阪府立島上高等学校教諭)

藤田价浩(財団法人京都古文化保存協会)

井上裕雄(京都府文化芸術室長)

武 田 浩 (京都府教育庁指導部長)

東条寿(京都府教育庁指導部)

監 事

岡田忠司(京都府出納局長)

安 井 茂(京都府監查委員事務局長)

事務局長 荒木昭太郎

総務課 課長白塚 弘

会 計 安田正人

主 事 安達佳明

嘱 託 中西 修 冨田敦子

/ 杉江昌乃

調査課課長堤圭三郎

課長杉原和雄

企画資料 主 任 山口 博担 当 調査員 山口 博

調查員 田中 彰 土橋 誠

// 田代 弘

嘱 託 長関和男

第1担当 王太 長谷川達

調查員 竹原一彦 増田孝彦

/ 藤原敏晃 山下 正

// 三好博喜 肥後弘幸

調查員 伊野近富 引原茂治

/ 竹井治雄 岡崎研一

// 森下 衛 西岸秀文

調查員 石井清司 村尾政人

// 石尾政信 黒坪一樹

// 小池 寬

第4担当 主任 松井忠春

調查員 小山雅人 戸原和人

〃 岩松 保 荒川 史

センターの動向 (60.4~5)

1. できごと

- 4.3~16 新規採用職員研修実施
- 4.16 隼上り遺跡(宇治市)発掘調査開始
- 4.17 綾中遺跡(綾部市)発掘調査開始
- 4.18 篠窯跡群(亀岡市)発掘調査開始
- 4.23 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 4.24 長岡京跡連絡協議会開催
- 5. 2 京都府教育長と理事長との懇談
- 5. 7 篠窯跡群黒岩地区(亀岡市)発掘調査 開始
- 5. 8 長岡京跡左京第124次(向日市)発掘 調査開始

木津地区遺跡(木津町)発掘調査開始

- 5. 9 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(福知 山市)発掘調査開始
- 5.13 上中遺跡(北桑田郡京北町)発掘調査 開始
- 5.20 下畑遺跡(与謝郡野田川町)発掘調査 開始

河守遺跡(加佐郡大江町)発掘調査開始

- 5.21 芝山遺跡(城陽市)発掘調査開始
- 5.22 長岡京跡連絡協議会開催
- 5. 23~24 全国埋藏文化財法人連絡協議会 役員会一於盛岡市一出席(荒木事務局 長)
- 5.30 志高遺跡(舞鶴市)発掘調査開始

2. 人事異動

4.1 山口 博,山下 正調査員京都府教 育委員会職員に採用さる。

山口 博,山下 正,西岸秀文,肥 後弘幸,京都府教育委員会から派遣さ る(調査課調査員)。

山口 博調査員,主任調査員に昇任。

4.17 草木慶治氏監事を解嘱される。古澤俊彦主事退職(京都府商工部観 光課に転出)

> 安達佳明,京都府教育委員会より派 遣さる(総務課主事)。

4.18 安井 茂氏監事に委嘱される。

受贈図書一覧 (60.3~5)

(財)岩手県埋蔵文化財センター

秋田県埋蔵文化財センター

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業 団

(財)市原市文化財センター (財)東京都埋蔵文化財センター

神奈川県立埋蔵文化財センター

石川県立埋蔵文化財センター

山梨県埋蔵文化財センター

(財)大阪府埋蔵文化財協会 (財)大阪文化財センター

埋蔵文化財天理教調査団 鳥取県埋蔵文化財センター (財)愛媛県埋蔵文化財調査セン ター

福岡市埋蔵文化財センター

札幌市教育委員会 訓子府町教育委員会 平賀町教育委員会 袖ケ浦町教育委員会

市原市教育委員会 東京都教育委員会 府中市教育委員会 神奈川県教育委員会 平船Ⅲ遺跡発掘調查報告書,長者屋敷遺跡発掘調查報告書(Ⅱ),嶽 Ⅱ遺跡発掘調查報告書,湯の沢Ⅲ・繋沢Ⅱ・石神Ⅱ遺跡発掘調查報 告書,小屋畑遺跡発掘調查報告書,滝沢城跡発掘調查報告書,紀要 Ⅳ(昭和58年度)

東北縦貫自動車道発掘調査報告書 XI,同 XI, 広沢山遺跡発掘調査報告書, カウヤ遺跡, 七曲台遺跡群, 遺跡詳細分布調査報告書, 払田柵跡, 同 I, 秋田県埋蔵文化財センター年報 3

県立文書館遺跡,荒砥二之堰遺跡,浜町屋敷内遺跡 C 地点,研究紀要-2-

皿郷田茂遺跡, 石川城郭跡, 片又木遺跡

多摩ニュータウン遺跡(第1分冊~第7分冊),東京都埋蔵文化財センター 年報4,研究論集Ⅲ

小池遺跡

柳田タンワリ1号窯跡,敷地天神山遺跡群,花見月遺跡,鹿首モリガフチ遺跡,羽咋市シャコデ遺跡,羽咋市気多社僧坊跡群

牛奥遺跡調査報告書

(財)大阪府埋蔵文化財協会要覧

大阪文化誌 第18号, 松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ,同Ⅱ, 美園

奈良盆地の古環境

東宗像遺跡,総泉寺山横穴群発掘調査概報 赤岸鼻遺跡

収蔵資料目録 第1集一西区拾六町ツイジ遺跡 1一

札幌市文化財調查報告書 XXVIII

日出一11遺跡

駒泊遺跡

川原井中世城跡調査概報, お紬塚古墳遺構確認調査報告書, 袖ケ浦 町伊丹山遺跡, 鬼塚古墳

永田 • 不入窯跡

狛江市·寺前東遺跡

武蔵国府の調査 XV

神奈川県埋蔵文化財調査報告27

川崎市教育委員会

鎌倉市教育委員会

金沢市教育委員会

富来町教育委員会

鳥越村教育委員会 福井県教育委員会

長野市教育委員会 多治見市教育委員会

掛川市教育委員会

菊川町教育委員会

湖西市教育委員会

浜松市教育委員会

名古屋市教育委員会

常滑市教育委員会

豊田市教育委員会

滋賀県教育委員会

愛知川町教育委員会

今津町教育委員会

米原町教育委員会

和泉市教育委員会

堺市教育委員会

高槻市教育委員会

富田林市教育委員会

東大阪市教育委員会

篠山町教育委員会

田原本町教育委員会

鳥取市教育委員会

川崎市文化財調査集録,細山代官山遺跡

手広八反目遺跡発掘調査報告書

昭和59年度 金沢市埋蔵文化財調査年報,金沢市新保本町東遺跡•西

遺跡・金沢市近岡カンヌンボ遺跡、金沢市千木イワスクリ遺跡、金

沢市松寺遺跡, 金沢市東市瀬遺跡

富来町福浦港ムカイヘラソ遺跡・アワガタニ遺跡発掘調査報告

瀬木野遺跡

福井県立博物館常設展示図録, ふくいミュージアム No. 4~No. 7

西谷山古墳群

石川条里的遺構(3)

大畑大洞古窯跡群(脇之島2号窯)発掘調査報告書

中原遺跡発掘調査報告書, 山下遺跡

三沢西原遺跡

東笠子遺跡群発掘調査概報,青平古窯跡・新古古窯跡発掘調査報告

書,大沢第4・5地点遺跡発掘調査報告書,観音山遺跡発掘調査報

告書, 国道1号線潮見バイパス (湖西地区) 宿南Na 4 遺跡 (元屋敷遺

跡)確認調查報告書

半田山遺跡(Ⅲ)·下滝遺跡(I)発掘調査報告書

天白 • 元屋敷遺跡発掘調査報告書

鎗場 • 御林古窯址群

豊田市郷土資料館収蔵品図録 V

昭和58年度 滋賀県文化財調査年報

沓掛遺跡·市遺跡Ⅲ発掘調査概要

今津町文化財調査報告書第4集

三大寺遺跡, 磯山城遺跡

府中遺跡群発掘調査概要V

四ツ池遺跡・陶器干塚29号墳,四ツ池遺跡,鈴の宮Ⅳ,堺市文化財

調査報告 第18集, 同第19集

嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調查概要9

中野遺跡発掘調査概要Ⅱ,同Ⅳ,喜志遺跡発掘調査概要Ⅰ,錦聖遺

跡発掘調査報告書

日下遺跡発掘調査概要-第11·12次調査-

雲部車塚古墳, 古代祖先のあゆみ

唐古・鍵遺跡,黒田大塚古墳

津ノ井宇祢遺跡・津ノ井40号墳, 秋里遺跡発掘調査概要報告書, 西

桂見遺跡Ⅱ

宮崎県教育委員会

宮崎市教育委員会

北網圏北見文化センター

八戸市博物館

秋田県立博物館

山形県立博物館

埼玉県立さきたま資料館

国立歴史民俗博物館

東京都世田谷区立郷土資料館

調布市郷土博物館

八王子市郷土資料館

横浜市三殿台考古館

茅ケ崎市文化資料館

小松市立博物館

福井県立若狭歴史民俗資料館

静岡市立登呂博物館

名古屋市博物館

名古屋市見晴台考古資料館

大阪市立博物館

東大阪市立郷土博物館

柏原市歷史資料館

(財)辰馬考古資料館

奈良国立文化財研究所 飛鳥資

料館

島根県立八雲立つ風土記の丘

佐賀県立九州陶磁文化館

釜山大學校博物館

宮崎県文化財調査報告書 第28集, 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告

書第2集, 同第3集

西ノ原地区遺跡

広郷8遺跡(Ⅱ)

縄文の美, 研究紀要 第1巻

秋田県立博物館研究報告 第10号

山形県立博物館研究報告 第5号

埼玉県立さきたま資料館-要覧-,稲荷山古墳,愛宕山古墳,鉄砲

山古墳

国立歷史民俗博物館研究報告 第5集, 歷博 第9号

世田谷地誌集、地蔵および諸尊、道標および供養塔、重要文化財

大場家住宅調査報告書、館報-20年のあゆみ-

調布の年中行事, 木とくらし

八干子市鄉十資料館考古資料収蔵目録 I

大むかしのよこはま

茅ケ崎 職人のわざ (上)

所蔵品目録Ⅱ

年報 1985

特別展 音の民俗学

名古屋市博物館研究紀要 第8巻

昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書,尾張藩御廟所遺跡発掘

調査概要報告書,伊勢山中学校遺跡発掘調査概要報告書,見晴台と

なごやの遺跡, 見晴台教室 '84

住吉さん

図録 中世のくらし, 展示解説 かわちのくに

柏原市所在遺跡発掘調査概報 1984年度,柏原市埋蔵文化財発掘調査

概報,明神山系遺跡分布調査概報 [

秋季展-銅鐸-, 秋季展-兵庫の古代寺院Ⅱ-

大官大寺

古代の住まい

百間窯・樋口窯

釜山堂甘洞古墳群,金海水佳里貝塚 I,金谷洞栗里貝塚,釜山華明

洞古墳群, 東萊福泉洞古墳群 [

東北学院大学 東北文化研究所 東北学院大学 東北文化研究所紀要 第16号, 東北学院大学論集

東京大学文学部考古学研究室 國學院大學文学部考古學研究室 國學院大學考古學資料館

日本大学史学会 早稲田大学考古学会 東海大学史学会 愛知学院大学文学会 関西大学考古学資料室 奈良教育大学古文化財教育研究 室 帝塚山考古学研究所

広島大学

文化庁 国立国会図書館 宮内庁書陵部 玉川文化財研究所

大阪郵政考古学会 朝鮮学会 西谷真治教授還暦祝賀発起人会 (財)古代學協會 保光たたら発掘調査団 豊北町町民センター 愛媛県青果農業協同組合連合会 博物館等建設推進九州会議

(財)京都市埋蔵文化財研究所 向日市教育委員会 大山崎町教育委員会 綾部市教育委員会 福知山市教育委員会 宮津市教育委員会 歷史学·地理学 第15号

東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第3号, 栄浦第一遺跡 物見処遺跡 1985, 北堂C遺跡・明神堂遺跡 國學院大學考古學資料館要覧 1983, 國學院大學考古學資料館紀要第 1 輯

史叢 第34号

古代 第78·79合併号

東海史學 第19号

愛知学院大学論叢文学部紀要 第14号 関西大学考古学等資料室紀要 第2号 古文化財教育研究報告 第1号~第14号

弥生前期地域論,縄文から弥生へ,帝塚山考古学 No. 5,帝塚山考古学研究所概要

広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報IV

広域遺跡保存対策調査研究報告 6 日本全国書誌 週刊版 書陵部紀要 第36号

東方横穴墓群発掘調査報告書,梶山北遺跡発掘調査報告書,殿屋敷 遺跡群 C 地区発掘調査報告書,すぐじ山下遺跡発掘調査報告書 郵政考古紀要 'APXAI'A X

朝鮮学報 第113輯, 同第114輯

元稲荷古墳

古代文化 第37巻第3号~5号

保光たたら

土井ケ浜遺跡

松山市・船ケ谷遺跡

文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU 第16巻

増補改編 鳥羽離宮跡 1984 向日市史 上巻, 同下巻 大山崎町の歴史と文化 木寺北遺跡調査概報 和久寺跡, 池の奥古墳群

宮津市の指定文化財 (第1集),日置地区第3次発掘調査概要,宮津 城跡第3次発掘調査概要 野田川町教育委員会 加悦町教育委員会 網野町教育委員会 京都府立丹後郷土資料館 京都府立山城郷土資料館 京都府立総合資料館 京都市考古資料館 宇治市歴史資料館 橘女子大学 同志社大学考古学研究室 花園大学考古学研究室 京都市文化観光局 精華町の自然と歴史を学ぶ会

井 上 定 清

清水尚田中義昭

茂原信生 安田博幸

高浪古墳発掘調査概報

小虫古墳群, 蛭子山古墳発掘調查概要

三宅遺跡第1次発掘調査概要

織りと暮らし

酬恩庵の文書から

京都府資料目録追録 No. 1, 文書解題, 資料館紀要 第13号

京都市考古資料館年報 昭和58 • 59年度

宇治茶

橘女子大学研究紀要 第11号

考古学と移住・移動, 伊木刀・熊野神社遺跡

妙心寺境内地の調査

京都市の文化財

波布理曽能 第2号

兵庫県の中世城館・荘園遺跡,柏原市埋蔵文化財発掘調査概報,原山・田辺・大県遺跡,明神山系遺跡分布調査概報 I,本郷遺跡・玉手山遺跡,大県南遺跡

正伝寺南・針江南・針江北遺跡発掘調査概要

山陰地域研究 $N_0.1$ 受地だいやま遺跡発掘調査概報I,川島谷遺跡群I,同 Π

古代家犬の系統と移動に関する研究

奈良県桜井市舞谷 4 号墳の漆喰の化学分析,福島県石川郡玉川村宮 ノ前古墳の切石積横穴式石室壁面に残存する白色漆喰様物質の化学 分析

一編集後記一

梅雨期に入り、何かと天候の悪い日が続きますが、情報16号が完成しましたのでお届けします。

本号は、昭和60年度最初の情報ですので、昭和59年度の発掘調査 概要と昭和60年度の発掘調査予定を掲載いたしました。また、昨年 度の発掘調査で成果のあった亀岡市小金岐古墳群について掲載させ て頂きます。資料紹介も亀岡市穴川遺跡出土遺物をとりあげるなど 充実した内容になっております。

なお, 府下遺跡紹介は, 今年度, 官衙遺跡と古墳を中心にとりあ げていく予定ですので, 御期待下さい。

(編集担当 土橋 誠)

昭和60年6月29日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究 センター

> 〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3 TLL (075)933-3877(代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社 代表者 中 西 亮 〒602 京都市上京区下立売通小川東入 III (075)441-3155 (代)